



東京藝術大学のこれまで、いま、これから。

藝える 2

特別付録
シール付き

藝える 第2号

藝える

東京藝術大学広報誌
『藝える』第2号

発行日
2018年3月15日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
岩淵恵子
中本ちはる(アリヤマデザインストア)

写真
富田里美
(表紙、P2~26、P38~39)

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学渉外事業企画室

印刷
シナノパブリッシングプレス

表紙：
戦没画学生 市瀬文夫氏の
スケッチブック

東京藝術大学



藝える



「藝える」は「」と読み、植えると同じ意味をもちます。今

号の特集は「藝大 130 周年」です。東京藝術大学の前身、東京音楽学校と東京美術学校は、1887(明治20)年10月に設立されました。130周年記念事業として本学では100以上のイベント、展覧会、コンサートを開催しました。『藝える』では、その中から『藝大茶会 それゆえに』と『戦没学生のメッセージ〜戦時下の東京音楽学校・東京美術学校』の2つにフォーカスします。ただの報告記事ではなく、2つのイベントを起点にして『藝える』ならではの視点から本学の歴史を深掘りする記事づくりを目指しました。なぜ藝大が大茶会を行うのか。いま岡倉天心から何を学ぶべきなのか。芸術を学ぶ学生が戦争とどう向き合ったのか。時代に翻弄され戦場で命を落とした芸術学生の創作活動を掘り起こし継承する意義とは? 読んで、感じて、考えていただけると幸いです。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01

藝大130周年

02

特集①

それゆえに、奇跡。
藝大茶会の軌跡。

14

特集②

作った! 生きた!
戦没学生。

11

藝大席インスタレーション制作・
小沢剛教授が語る
「すべては歴史の中にある」

15

クラウドファンディングでコンサートが実現。
遺された楽譜から再現した音楽。

27

特集③

「GEIDAI 130 ARTS」
プロジェクトとは何だったのか?

20

無言館を訪ね、
画家・野見山暁治らに聞く。
失われゆく日常を描いた絵画。

34

授業 SANKAN

ハマの映像研究科編

1時間目＝大学院映像研究科・映画専攻

2時間目＝大学院映像研究科・メディア映像専攻

38

藝える人 村澤丈児

(大学院音楽研究科 博士後期課程2年)

40

お知らせ



1943年9月12日、戦没学生の葛原守氏（左手前から4人目）、
草川宏氏（中央で両肩を組んでいる）が学友たちと山本元
帥讃仰演奏会后、新潟県長岡の旅館にて。→P14～20

特集

藝大130周年。

上野の森に芸術を志す学徒が集いはじめて130年。
その歴史を130周年記念事業として開かれた茶会と
コンサートを入り口にして振り返ります。温故創新。



それゆえに、奇跡。 藝大茶会の軌跡。

日本四大流派の家元がそろい、
壮大なインスタレーションが出現。
なにゆえに、こんな茶会ができたのか？
茶道と藝大の妙なる縁が、
そこにありました。

文Ⅱ 大谷道子



写真右／藝大席待合には、先端芸術表現科准教授・鈴木理策が撮影した上野校地内の森の写真が壁面いっぱいに掲げられた。木立の奥には岡倉天心像が。空間設計はデザイン科の橋本和幸教授。左／茶道具類はすべて工芸科の教員による特製品。



写真上／大学美術館陳列館2階の家元席待合。
澤学長や音楽学部教員、学生が生演奏で場を
もり立てた。120周年は美術学部主体だった
が、130周年は総力結集しての開催に。下／小
沢剛作《Imperfection》部分。西洋と東洋の美
が、ともに雲の中へ。藝大席の設え。

雲の上か。それとも、天国か。

昨年10月、美術学部絵画棟の大石膏室に出現した白い空間は、来訪者たちを圧倒した。普段、ルネサンス期の彫刻や仏像の名作などを模った数々の石膏像で学生たちがデッサンに励む部屋をすっぽりと包むのは、大量の羊毛と木綿綿。ところどころ体を露出させた古の女神や英雄たちは、威厳と風格をたたえたいつもの姿から様相が一変している。これは、現代美術家で先端芸術表現科教授・小沢剛氏によるインスタレーション作品。題は《Imperfection》、すなわち「不完全」とある。

謎めいた題名に込められた意味を解く前に、縁起を述べよう。この作品は2017年、東京藝術大学創立130周年を記念し開催されたスペシャルプログラムのひとつ『藝大茶会 それゆえに』（10月7日・8日・14日・21日開催）のために制作されたもの。しかも単なる展示ではなく、大石膏室を会場に「藝大席」と銘打って催された茶会席の設えである。藝大で茶会？ とシンブルに疑問を抱く人も多いだろう。さらに、内容を詳細に知れば、



疑問は大きな驚きに変わる。何せこの茶会、表千家不審菴、裏千家今日庵、武者小路千家官休庵、遠州茶道宗家の4流派の家元が藝大内の正木記念館を会場に日替わりで挙行する「家元席」、数々の美術工芸の逸品を扱う東京美術倶楽部、京都美術倶楽部が名品を取り合わせて設ける「美術倶楽部席」（会場は東京国立博物館・応挙館）、そしてこの大石膏室で催される「藝大席」と、3種類の席からなる一大茶会。いうならば、茶と美術のロイヤルストレートフラッシュ。茶道、美術、両関係者ならずとも思わず息を吞んでしまうような、奇跡的に壮大なプログラムなのだ。

なぜ藝大で、しかもなにゆえにこの豪華絢爛な顔ぶれで？ ますます深まる謎を解く

キーマンがいる。美術学部絵画科日本画教授・手塚雄二氏。藝大茶会の誕生と挙行までを取り仕切った教授は、「だって、藝大ですから」と、ごくあっさりと回答を口にした。

「茶会というのを、思い描いてください。寄付（客が待ち合わせる場所）に入り、さあ、何が待っているんだろうと思ひながら露地（通路）を渡り、躡口（屈まなければ通れない小さな入り口）をくぐって茶室に入ると、目の前に書がある。この茶会のテーマはこれですよという文字が書いてあるんです。そうして亭主が登場し、テーマにまつわる道具が並ぶ。つまり、茶会は完全なるインスタレーションなんです。ある体験をさせて、その体験がいったい何だったのかを考えさせる手法は、まさに現代美術そのものと言えます」

藝大茶会に先立つこと数週間前、我々は茶人でもある手塚教授の自宅茶室で、一連の茶席の流れを体験させてもらった。露地を通り、茶室に入り、一服の茶を飲み、息を吐く……。俗世から切り離されたその時間は、なるほど、別世界へのショート・トリップ。

「体験してみると、総合芸術だということが



まさに、雲の中の茶会。絵画棟・大石膏室にて開かれた「藝大席」。4日間、2000名に薄茶を点てたのは、東京藝術大学裏千家茶道部。茶碗、茶杓、茶入、帛紗等々、道具類がほぼ学内制作でまかなえるのは、藝大ゆえの強み。





写真右／裏千家家元席（10/8）に臨席の澤和樹学長、「それゆえに」の名付け親・日比野克彦美術学部長、手塚雄二教授。
中／京都美術倶楽部席。菓子もそれぞれ特注品。左／武者小路千家家元席（10/14）に展示されていた『茶の本』初版本。

わかるでしょう。この独特の見せ方、感じさせ方を、藝大が実践しないでどうするんだ、と。しかも藝大席は、最先端の現代アートの中でお茶を飲むんです。いいじゃないですか！

そもそも、藝大と茶のつながりの元をたどれば、前身である東京美術学校の設立に貢献し、第2代校長も務めた岡倉天心に行き着く。岡倉は晩年、日本における茶の歴史と茶道を通しての和の精神美を綴った『茶

の本』（原題『THE BOOK OF TEA』。原文は英文）を上梓。茶道を《日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拜することに基づく一種の儀式であって、純粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義を諄々と教えるもの》であり、《要義は「不完全なもの」を崇拜するにある》、《人生というこの不可解なものの中に、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てである》と示している。不完全。小沢教授の作品タイトルは、この一節に由来する。

「でも、岡倉天心は茶道を東京美術学校に入

れなかった。書道も花道も、道のつくものはすべて。明治維新を経て設立された官立の美術学校に、流儀や家元制を入れないという考えが強くあったんじゃないでしょうか」

しかし、1世紀以上の時を経て、ついに藝大に茶道が持ち込まれた。実はこの茶会、10年前の120周年の際に、やはり現在と同じ布陣で挙行され成功を収めたのだが、4家元、国宝級の名物を持つ両美術倶楽部が顔をそろえるというのは、茶道の世界においても前代未聞。手塚教授から聞く開催までの道のりは、ごくかいつまんでも長大な縁起絵巻になりそうなほどに困難を極めている。

「でも、錚々たる家元の先生方、東京・京都の美術倶楽部にご協力いただき、再び『藝大茶会』を実現できた。これは、他のどこでもない、藝大だからできること。日本唯一の芸術系国立大学がお茶会を開催することの影響力は、とても大きいと思いますね。それに、何も藝大のためだけにやるのではなくて、いわば日本の文化そのものを、若い芸術家をはじめ、広く世の中に向かって発信できる、そのことに大きな意義があるんですから」



写真上／撮影＝佐野工芸社

場は用意された。時は流れて会期当日。訪れた藝大は、ただならぬ空気に支配されていた。美術学部構内には、ついぞ見かけない数の着物姿の淑女が群れをなし、普段は学生の憩いの場である大浦食堂は点心席に一変。ビシリと糊の効いた厨房衣に身を包んだ「東京吉兆」本店のスタッフが居並び、客を迎える。学内で10年ぶりに設けられた、一流料亭による点心席である。

各流派500席、合計2000席分用意されたお茶券は完売。会期最終日のこの日、開催されていたのは、武者小路千家官休庵による家元席だった。にわか予習でそろえた白足袋に履き替え、懷紙、黒文字を懷に、いざ、歴史ある正本記念館2階の書院へ向かう。

50人が一度に入る茶会の景色は、さしずめ犬神家の一族が勢ぞろいする場面か（語彙がすくなくてすみません）。取り囲むのは、120周年茶会時から10年ぶりにお目見えしたという、明治期日本画の巨匠・橋本雅邦の障壁画だ。家元は、さまざまなアーティストとの交流で知られる15代・千宗屋氏。話しかけていいのはもつとも上座に着く正客（主

賓）だけ……とは、手塚教授からの教え。予習できて本当によかった。静かに座り、話に耳を傾ける。

漏れ聞くところによると、お菓子は寛永11年創業の「両口屋是清」謹製。そしていよいよ、上座から回った茶碗を、見よう見まねの礼で受け取り（ドキドキ）、底にとろりとたゆたう濃茶を味わう。ううむ、濃い。まさに茶のエスプレッソ。

見れば、周囲には若い顔ぶれが多い。最終回ということもあり、ボランティアで立ち働いた学生たちが列席し、厳肅な茶席に果敢に（でも静かに）挑んでいる。よき景色かな。

席を辞して、大石膏室の藝大席へ。そこで見たのが、冒頭の商品である。毛と綿の雲海は人の熱気を吸って膨れ上がり、先端はふわふわと波立ってすら見える。背景となる美術作品と同じく、使用される風炉も釜も茶碗ほか道具も、この日のために工芸科の教授ら教員たちによって詠えられたもの。藝大茶道部員たちから薄茶を拝していただく。藝大だからできる唯一無二の、かつ空前絶後の茶席。まことにけつこうなお点前、である。



人生という、苦勞の波が絶えない海の上で、
《美を友として世を送った人のみが麗しい往
生をすることができると、岡倉天心は『茶
の本』に書き残した。そして、次のようにも
《永遠に向かって押し寄せる波濤^{はとう}のうねり
の中に、喜びと美しさが存している。何ゆえに
その心をくまないのか》

何ゆえに？ いや、それゆえにの芸術な
のだと、今、ここであらためて思わずにはい
られない。手塚教授は、日本で唯一、この茶
会を開ける場としての藝大について、こんな
ふうに言っていた。

「へりくだる必要なんかないと思います。む
しろ、学生たちに、日本一だという自負を心
の支えにできる作家になってくれ！」と煽り
立てるのが、教員の仕事でしょう」

かくして、130周年に込められた、さ
さしくかつ壮大な企ては成功を、いや、大
成功を収めて幕を下ろした。次は、後に続く
者たちが、麗しい生を存分に謳歌する番。東
京美術学校・東京音楽学校が1887（明
治20）年10月に開校してから迎える130回
目の春は、まもなく爛漫となる。



《Imperfection》設営風景。約500キロもの羊毛、綿を広げていく。不完全は決してネガティブな状態ではなく、「より可能性が開かれた、豊かな状態を示す言葉だと思う」と小沢氏。

藝大席インスタレーション制作・ 小沢剛教授が語る

「すべては歴史の中にある」

——『藝大茶会 それゆえに』で展示された
《Imperfection》、天界のような、墓場の
ような不思議な気配の作品でした。

小沢 そうですね。舂斗雲に乗っかっている
とか、ちよつとあの世とか死を連想させると
か。むちゃくちゃでしたけどね（笑）。大石
膏室はある種、藝大の聖域。そこで何かする
構想は、以前からあって、実は茶会は後付け
だったんですけど、わりと素直に自分の中で
接続できました。雲海と古美術というのはシ
リーズでやってきたことで、見飽きたもの、
二度と見たくないようなものを新しい、違う
角度から見られるようにしたいなと思って。
ちよつと違う設えをするだけで新鮮に見える、
という。

——「二度と見たくないもの」とは？

小沢 そりゃあ、石膏像ですよ。僕は受験のときの嫌な思い出とか、トラウマみたいなものをすごく抱えてて、大っ嫌いなんです、石膏デッサン。10代のすべてをあれに吸い取られた感じ。だから、大石膏室に行くと、聞こえないはずの音が聞こえてくるんです。時代時代の受験生たちの怨念とか、叫びとか……別に、大丈夫ですよ！ 本当は聞こえないんですけど！ でも、それが聞こえるうちは、まだ正常なのかな、と……わかんないな、何言ってるんだ俺（笑）。でもまあ、聞こえなくなったら、作家としてやばいですね。

——それをあらためて作品に取り込んでみようと考えたのは、なぜですか。

小沢 まあ、向かい合いたかったんですね。いったい石膏デッサンって何なんだ？と。これはどんな美術史家もキュレーターも見落としている点で、アーティストにとっても消したい、嫌な過去ではあるけど、このままでは誰もやらないし、藝大で働いているという今の僕の状況もあって……。石膏デッサンという、150年前にヨーロッパから輸入され

た教育法を、いまだに美術教育の根底に置いている藝大をはじめとした美大の現状はこのままでいいのか、ちゃんと取り出して、考え直さなければいけないんじゃないかと。

——世界的には、もう行われていない？

小沢 僕の調査では、もう今は日本以外でやっているところはそんなにないですね。西方の文化が大陸経由で伝わってきて、正倉院が世界中の美術品の倉庫になった、みたいな地域として日本のことを捉えれば、肯定もできるのかな。

——そうすると、作品から一種の墓場感を感じる理由もわかりますね。

小沢 そうですね。石膏は全部ゾンビ。それに、100年もあれば、いろんなものがまとわりついちゃうんですよ、きつと。

——茶道には、興味をお持ちでしたか。

小沢 これも大っ嫌いでした。20年くらい前、冗談で「ミルク道」というのをやったことはありましたけど。瓶入りの牛乳瓶をうやうやしく回して、パーン！って蓋を開けたりして（笑）。そのときにはじめて『茶の本』を読んだなあ。『まんが茶会入門』と一緒に。

——岡倉天心にも、関心は。

小沢 存在はもちろん知っていましたけど、できることなら一生関わり合いたくはないと思ってましたね。藝大ができた、明治のあの頃の時代の美術が、嫌で嫌で……。でも、今は逆になってますね。むしろ現代美術よりも、興味を持つていくかもしれない。

——それはなぜ？

小沢 単純に、歳を食ったからじゃないですかね。歳取ると、急に司馬遼太郎を読みはじめたりするじゃないですか（笑）。まあ、それは冗談で、現代美術家として、常に未知なものを作ろうと思ってるんですが、あるときから、新しいものを見るためには歴史的なもの、その中にヒントがあるんじゃないかと。僕が渦中にいる現代美術の今がなぜこの様な表現になっているのか、その根拠が見えれば、そこから学んで次のものを作れるということに、だんだん確信が持てるようになってきた。で、気がついたらどっぷり過去に浸りながら未来を見ている、という感じに。

——昨年、ヨコハマトリエンナーレに出品された『帰って来た不〇〇』は、岡倉天心（覚



インドを放した岡倉天心をテーマにした『帰って来た K.T.O.』より。「弱ってる時代を対象にしたほうが、描まえやすかった。性格悪いなあ、俺」

小沢 剛（おざわ・つよし）

1965年東京生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻、同大学院美術研究科壁画領域修了。近年の個展に『小沢剛：あなたが誰かを好きのように、誰もが誰かを好き』（2012・豊田市美術館）、『小沢剛個展：不完全——パラレルな美術史』（2018・千葉市美術館）などがある。2012年より東京藝術大学先端芸術表現科准教授、2016年より教授。

—— 作品を作り上げて、石膏像への嫌悪感は成仏させられた？
小沢 変なオーラは感じなくなってきたかな。空間全体、全部うまくいった感じで、妙に納得しちゃいました。お茶も、いただきましたよ。他の科の先生たちと。手塚先生もそうだけど、教員同士で実はあんまり話したことがなかった。大石石膏室をあんなんにして何言われるんだろうって、ちよつと自信がなかったりもしたんですけど。で

も今回、茶会に参加して打ち解けることができたのは収穫だったと思っています。藝大は自分の所属しているところが最高だと考える傾向があつて、僕も恥ずかしながら現代美術が本流だ、みたいになんて思ってたけど、ここ数カ月の体験で、数あるうちのひとつにすぎないんだなと。それぞれが、ゆがんだピースで、それが集まっているのが藝大。そう認めたほうが、美術の見方や表現が、もっと広がるんじゃないかと。

—— 『日本一』の藝大で、石膏デッサンの時代はこの先、まだ続くでしょうか。

小沢 どうかかなあ。日本一つっていても、世界では300番くらいかもしれないから。でも、卑屈になつてはいないですよ。海外の有名美大とつきあってみると、意外とたいしたことないのもわかるし（笑）。それでもやはり、石膏デッサン続ける理由は、僕には見出しにくいです。教育にしろ作品制作にしろ、絶えず問題提起して、何かできればなあとは思いますが。美術の方法で。

（2018年1月・千葉市美術館で収録）

1943年 10月 21日、明治神宮外苑競技場で開催された第1回出陣学徒壮行会。終戦までに出征した学徒兵の総数はまだ明らかではないが、数万人とも13万人とも言われている。



藝大130周年。
特集②

作った！ 生きた！ 戦没学生

東京藝術大学の前身である
東京音楽学校と東京美術学校から
戦地へ赴いた学生たち。
彼らの表現、他人事って言えますか？

文＝藤原えりみ



クラウドファンディングでコンサートが実現。

遺された楽譜から再現した音楽。

学徒出陣をご存じだろうか。太平洋戦争末期の1943（昭和18）年、大学や専門学校で学んでいた20歳以上の主に文科系男子学生が徴兵され出征した。東京音楽学校で西洋音楽を学びつつ、日本的な表現を追い求めていた学徒兵の多くも還らぬ人となった。美術の戦没学生に関しては「無言館」による調査収集（P20参照）があるが、官立初の男女共学校であり、男子学生の比率の少ない音校出身の戦没学生の調査は進んでいなかった。2015（平成27）年、戦後70年の番組企画や記事の情報収集に当たっていたTBSと毎日新聞社が、音校学生であった村野弘二氏と鬼頭恭一氏の譜面を発見。「母校で何かできないだろうか」という申し出に、同年、オーペンキャンパスの一環として鬼頭氏の器楽曲3曲と村野氏のオペラ歌曲1曲が演奏された。プロデューサーを務めた東京藝術大学演奏芸術センターの大石泰教授によれば、今回の

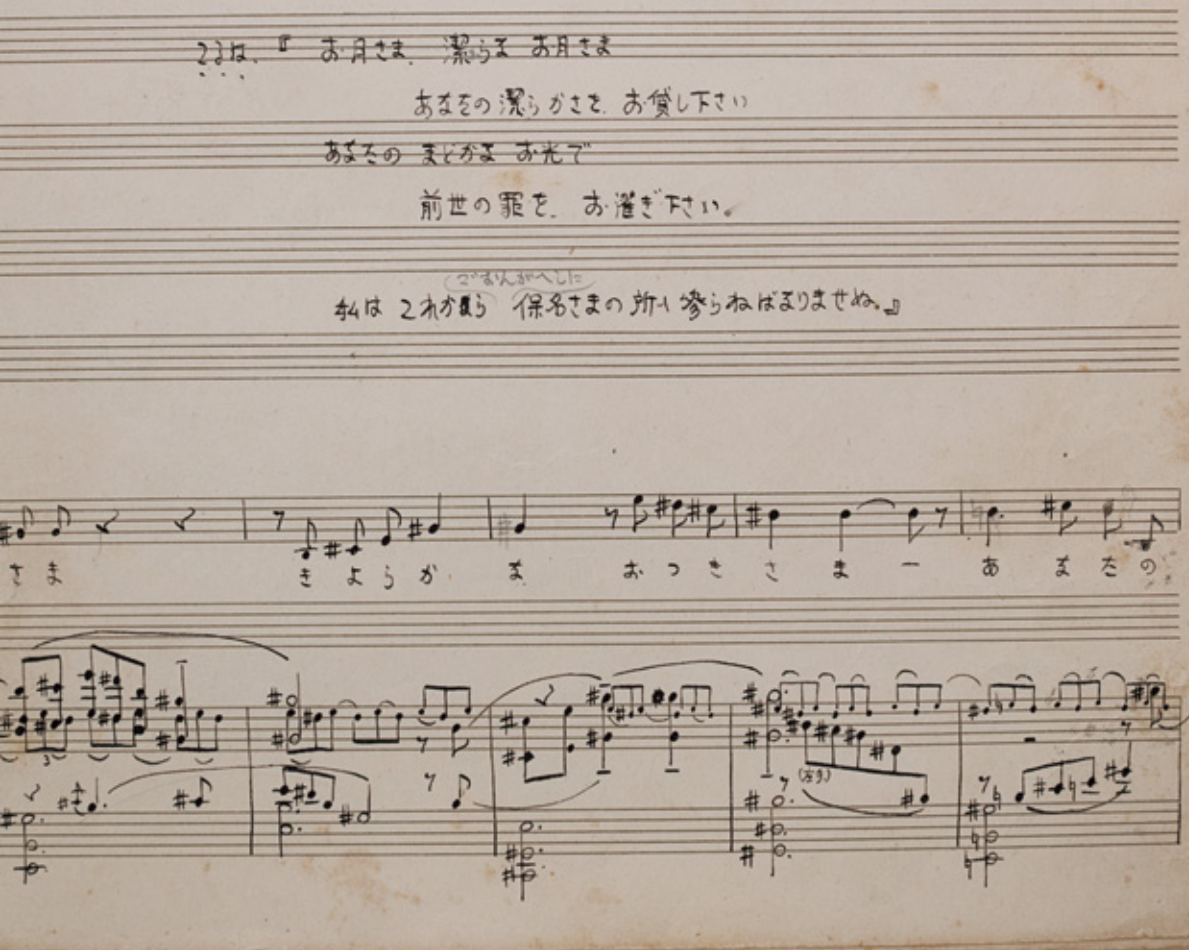
プロジェクトは、本格的な調査のために文部科学省の科学研究費を獲得した大学史料室の橋本久美子先生、そしてこの時代に関心をもち研究を重ねてきた楽理科の土田英三郎教授からの提案により始まった。ただし、演奏芸術センターには単独イベントの予算枠がなかったため、藝大創立130周年記念事業に申請。認定はされたものの十分な予算はつかず、クラウドファンディングに挑戦することに。

これを機に、戦没学生をめぐる調査研究の継続と情報収集、そして情報のアーカイブ化の構想も立ち上がった。音校だけでなく美校も含めての、藝大としては初の戦時下の検証作業共同プロジェクトとなる。ファンディングは開始から1カ月と1週間後、当初の目標金額300万円を達成。最終的には500万円弱の資金を集めることができた。

そして17年7月30日。東京藝術大学音楽学部の第6ホールでシンポジウム『戦時下の東

京音楽学校・東京美術学校（アーカイブ構築に向けて）と、奏楽堂でトークイン・コンサート『戦没学生のメッセージ』が開催された。コンサートでは、澤和樹学長をはじめとする藝大の教員や学生・卒業生により、2年前に演奏された村野・鬼頭氏と新たに譜面が発見された草川宏氏と葛原守氏の楽曲14曲が演奏された。演奏の合間には、橋本久美子先生や作曲科の小鍛冶邦隆教授の戦時下の記録と教育をめぐるお話、さらには1943（昭和18）年に美校を繰り上げ卒業し満州に出征した画家の野見山曉治氏と、音校の本科作曲部2年生の9月に海軍予備学生となり、45（昭和20）年9月に繰り上げ卒業した作曲家の大中^{おなかつ}恩氏、そして藝大の修了生と在校生によるクロストークも。

トークでは「僕は戦地で死ぬんだろうと思っていた」と野見山氏。そして大中氏が西條八十の詩に曲をつけた《幌馬車》の演奏。大中氏は別のインタビューで「これが僕の遺作になるのかと思った」と語っている。常に死と背中合わせにあった当時の若者の、「明日はない」「いつ死ぬか」という日々胸が張

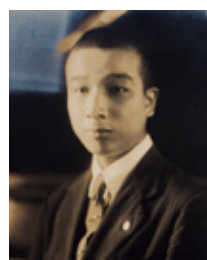


村野弘二氏のオペラ《白狐》(岡倉天心作)より第二幕〈こるはの独唱〉の譜面(部分)。命の恩人である保名(やすな)の妻の姿を借りてともに暮らす、本物の妻の帰還により保名のもとを去る白狐の物語。白狐のこるはが人間の姿に変えてほしいと月に祈る場面。

り裂けるような切迫感がにじみ出す。「私の父もその世代でした。工学部から海軍技術将校となったそうですが、戦線には行っていない。でも死ぬのは当たり前で、いつでもどう死ぬかが重要だったと聞きました」と、橋本久美子先生。「ですから、生き残った人たちには負い目もあったかもしれませんが……」。草川宏氏の『自由日記』の朗読もあったのだが、学徒出陣によって「ようやくお国の役に立てる」という件に、戦後生まれの一人としては「そういうものなのか……」と小さくショックを覚えた。「でも」と橋本先生。「音楽など軟弱だと考えられていた時代ですから、音



鬼頭恭一 (1922～1945年)



葛原恭 (1922～1945年)



草川宏 (1921～1945年)



村野弘二 (1923～1945年)

大石泰教授(左手前)の司会によるクロストーク。野見山暁治氏(左中)と大中恩氏(左奥)。ピアノを挟んで右側に東京藝術大学音楽学部・美術学部の在校生および修了生たち。演奏中の楽曲は草川宏氏の《綴歌》。学生・卒業生有志によるコーラス。



忘るなよ 榮ある年を
若人よ 行末長く
我等今 此処につどえり
ああ希望 胸にあふるる

楽学生が『お国の役に立つ』ことに奮い立つのも当たり前のことだったでしょう。そうした心情に対して今の感覚で軍国主義というレッテルを貼るのは少し違うのではないかと思います。戦没学生だけではなく、彼らを育てた両親や兄弟姉妹も同じ時代の空気を吸っていたわけでしょう。そうした人々の心情や生活意識、当時の状況を私たちはもっとよく知る必要があるのではないのでしょうか」

遺された譜面の大半は習作に近く、楽曲の一部しかないものもあり、清書され完成した楽譜は少ない。橋本先生は「絵であれば、塗り残しがあっても描きかけであっても、そのまま見て受け止めることができるかもしれません。でも譜面の場合は単なる未完成作になってしまふ。絵では描かれていない部分を他人が描き足すなどいんでもないことでしょうし、音楽でも同じです。しかし書くはずの音符が書かれていないまま演奏されれば、誰が聴いても違和感のあるものになってしまいます。それなら音として聴こえるようにしないで楽譜を並べておけば良いのか……。ご遺族の中には、完成作ではないものを大勢の聴

衆の前で演奏することに抵抗を覚えられる方もいらっしゃる」と語る。

専門家ならば譜面を見ただけで音が聞こえてくるだろうし、作者の意図や創作上の迷い、目指したけれど達成できていない地平すら見抜けるかもしれない。だがクラシック音楽の基礎的素養に乏しい私のような素人にとつては、音階を読み解くことはできても、脳裏に音が鳴り響いてこないのだ。

「学生ですから、先生の指導の痕跡や彼らがよく聴いていた楽曲（フランスの楽曲や古典的な楽曲）からの影響関係が透けて見える。でも、『未熟な段階にある学生の絵を並べた美術館があっても良いじゃないか』という、無言館設立に関わった野見山先生のような考え方も重要ではないかと。たとえ完成してなくても、彼らの中には書きたい楽曲が鳴り響いていたはずです。それを伝えるには、なんらかの方法で音にする機会が必要だと思います」。大石教授も独創性については橋本先生と同じスタンスだ。「作曲科の先生からすれば『これは優れている、これは幼い』という判断もあるでしょう。けれども、その点を度

外視して行ってみたわけですね。戦争で死ななければ大成したかもしれないという可能性を、否定することはできないですから」

取り上げられた4人は戦時下に学生時代を過ごし、共通する基礎を学びながらも、それぞれ個性を輝かせている。村野氏や草川氏の作品の中にはすでに学内で演奏された曲もあり、鬼頭氏の作品には配属先の築城航空隊で生まれた歌曲もあり、葛原氏の作品には担当教員の指導の跡が残された室内楽もある。習作に近いものまで掘り起こして公開演奏されること自体、藝大でも異例のことだろう。いずれにせよ、大学が把握できたのは遺族から提供された戦没学生の作品だけで、それ以外の人々の学生時代の作品を把握できていない。なお、演奏においては演奏家の存在が大きいという。「確かに楽譜あつてこそなのですが、演奏は演奏者によって異なるだけでなく、同じ演奏者でも感じ方や解釈の仕方によって演奏そのものが変わっていくんですね」と橋本先生。「村野さんの《こるはの独唱》も鬼頭さんの《雨》も、一昨年と今回ともに永井和子先生（声楽科教授）が歌ってくださいました。

前回は初めて出会う感動が伝わる印象深い演奏でしたが、今回は理解や思いが深まり、魅力が増していたように思います。同じことが鬼頭さんの曲を2回とも演奏された澤和樹先生のヴァイオリンにも当てはまり、今回、より曲の良さが出て聴き応えのある演奏になったのではないでしょうか。重要なのは、私たちが今の時代の光を当てて、後世に伝えていかなければならないということ。ですから、一流の演奏者に委ねることも大事ですが、現役の学生に演奏してもらうことも意味があるでしょう。楽譜をただ積んでおくのではなく、こういう形で公表していくやり方もあつて良いのではないかと」

ここで改めて、今回演奏された楽曲の作者である4人の学生を紹介しておきたい。

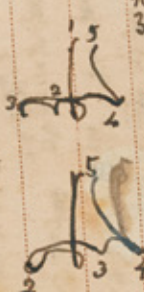
まずは1940（昭和15）年予科に入学した葛原守氏。翌年、本科器楽部ピアノ専攻に進み、43年の繰り上げ卒業演奏会にて、ショパンの《幻想曲へ短調》を演奏。翌年3月応召、フィリピンで罹病。45年4月12日、台北陸軍病院丸山臨時分院にて戦病死。享年22歳。

次いで1940（昭和15）年予科に入学し

晴日

五拍子の振り方
即ち三拍子と二拍子に分けて

振
3



スツアー 讀みお練四月

中昔の授業は夜間ばかり。頗る体か
知つてゐた。どうも左へキコウ専攻を
教へてゐるから、音楽の花をかたがえ
に習ふと教へると云ふ事だ。非難の言ひ
にもあつた。おまけには、自今迄の地況に於ける事
は、皆然り。藤利といふと一打一をた

須

事端要生

又新志に思ひ出するは、いつとする。一、長、後
習とれる。定、増、元、の、新、に、依、る、と、今、後、
元、も、諸、師、に、な、つ、た、と、う、で、彼、か、中、者、
依、る、事、と、依、り、彼、の、同、期、生、で、在、家、の、を、
三、人、共、他、は、然、元、清、二、中、者、を、依、る、事、に、な、つ、
た、歟、一、寸、奇、し、を、巡、り、今、は、せ、で、は、あ、つ、

五月十七日(水)

五月十八日 木

難波走^が今日曳^ひ拔^ひて愛^{あい}のリードと金^{きん}
白鬼^{しろおに}せう文^{ぶん}れと私^{わたし}の頼^{たの}み^みたので、今^{いま}
一目^{ひと}掛^かけ、浦^{うら}島^{じま}と、東^{あづま}島^{じま}を、月^{つき}音^{おと}し十^{じゅう}
今日迄^{こんにち}に、既^{すで}作^{つく}のリードは、五^ご曲^{きょく}であ^ある。
浦^{うら}島^{じま}（藤^{ふじ}村^{むら}）黄^{わう}昏^{こん}（藤^{ふじ}村^{むら}）蛇^{へび}に降^{ふり}れ
て（藤^{ふじ}村^{むら}）智^ち恵^えの歌^{うた}（藤^{ふじ}村^{むら}）晚^{ばん}歌^か（霞^{かすみ}風^{ふう}）
以上が、僕^{わが}のリードの全^{ぜん}部^ぶであ^ある。

た草川宏氏。父は作曲家の草川信、兄たちや従兄も器楽演奏や理論研究、作曲に携わる音楽に囲まれた環境で育つ。41年に本科作曲部に進み、研究科で指揮法も学ぶ。43年9月、繰り上げ卒業。45年6月2日、フィリピンのルソン島バギオにて戦死。享年23歳。譜面の他に、入隊前の約半年間の日々を綴った『自由日記』や、入隊の際に父から渡された五線譜ノートに起床ラッパや蒸気船の音などを書き取った『軍隊生活』などが遺されている。

鬼頭恭一氏は1942(昭和17)年予科に入學。翌年、本科作曲部に進むが43年の11月仮卒業。45年7月29日、霞ヶ浦海軍航空隊にて開発中の液体燃料ロケット戦闘機「秋水」の飛行訓練中に、前方を通過したヘリコプターを避けようと掩体壕に激突して殉職。享年23歳。『鎮魂歌』などの譜面と音楽帳が今に伝わる。

最後に、1942(昭和17)年予科に入學した村野弘二氏。翌年本科作曲部に進むが、鬼頭氏同様11月に仮卒業となり入隊。45年8月21日、フィリピンのルソン島ブニヒヤンにて自決。享年22歳。中学生の頃から作曲に

熱中し、東京音楽学校入学以前にすでに島崎藤村の詩を歌曲にしていた。岡倉天心の英文オペラ『白狐』の脚本に基づくオペラを構想。入隊前に行われた校内の『出陣学徒出演演奏会』で「第二幕(こるはの独唱)」を発表。

彼らの学生生活は短かった。それでも「ベルリン・フィルの指揮をするのが夢」と語っていた鬼頭氏のように、一人一人が夢を追っていたことだろう。それだけに、終戦の年の落命に胸が痛む。とくに村野氏の最後は痛ましい。死去は終戦の日の6日後。それも自決。

無言館を訪ね、画家・野見山曉治らに聞く。 失われゆく日常を描いた絵画。

晩秋のある日、長野県上田市の無言館を訪ねた。上田電鉄別所線の塩田町駅でシャトルバスに乗り換え、無言館入口で下車。周囲には人気はなく、葉を落とした木立に囲まれた中世ヨーロッパの修道院を思わせる建物を目指して歩く。無言館の中はほの暗く、柔らか

当時、アメリカ軍に訓練された地元民による日本兵殺害は残虐を極めていたという。マラリアで体力を消耗し逃げることもかなわないう状態であった村野氏は、自らの誇りを守るために自決したのではないかと語る人もいる。

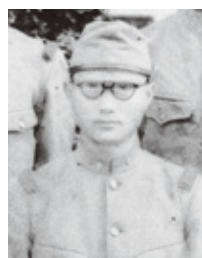
大石教授は言う。「彼らの音楽に触れて反戦メッセージと受け取る人もいるでしょう。ですが、僕自身は声高に反戦を訴える意図はないのです」。そして「反戦というより、いつか同じことが起こりうるということを認識してほしい」と。

い照明に浮かび上がる作品群がひっそりと鑑賞者を待っていた。

無言館設立のきっかけは、1995(平成7)年、館主の窪島誠一郎氏が信濃デッサン館(79年開館)主催の講演会に野見山曉治氏を招いた際の、「死んだ仲間たちの絵が今ど

日高安典《裸婦》油彩・キャンバス 73×50.4cm 制作年
不詳。思いを寄せていた美術学校でモデルを務めていた女
性に、個人的にヌードモデルを依頼して制作した作品。





日高安典 (1918～1945年)。1937 (昭和12)年、東京美術学校油画科入学。41年12月、繰り上げ卒業。『裸婦』のモデルに「この続きを描くためにかならず還ってくる」と言って出征。フィリピンのルソン島バギオにて戦死。享年27歳。

うなっているかと思うと気が気ではない」という野見山氏の言葉だった。「今ならまだ間に合うかもしれません」と、窪島氏は遺作収集の旅を申し出た。

野見山氏と戦没画学生作品との出会いは、さらに74年まで遡る。文筆家の宗左近氏と安田武氏とともにNHK『日曜美術館』で戦没画学生を取り上げた「祈りの画集」という番

組に出演。その後、NHK出版部の企画により、2人と手分けをして東京美術学校の戦没学生45名の遺族を訪ねることに。だが、「同級生の大倉裕美君の家で、帰りがけにコートを着せてくれたご母堂の手が、しばらく僕の背中から離れなかった。彼女には僕の姿を借りて息子が還ってきたように思えたのかもしれない。辛くなって、僕はこの取材の旅から降りたいとプロデューサーに訴えました」

ところが、すでに他の2人が途中で降りてしまったと聞いて、旅を続けざるを得なくなった。野見山氏の場合は在学中に交流のあった上級生、同級生、下級生も多く、美校での出来事や絵について語ることもできる。だが、遺品やどのように判断するべきかわからない学生作品を前にして、何を言うべきかわからない。文筆家の2人にとっては対応の辛い仕事となったのだろうという。取材の開始は76 (昭和51)年、翌年『祈りの画集 戦没画学生の記録』(日本放送出版協会)が出版された。

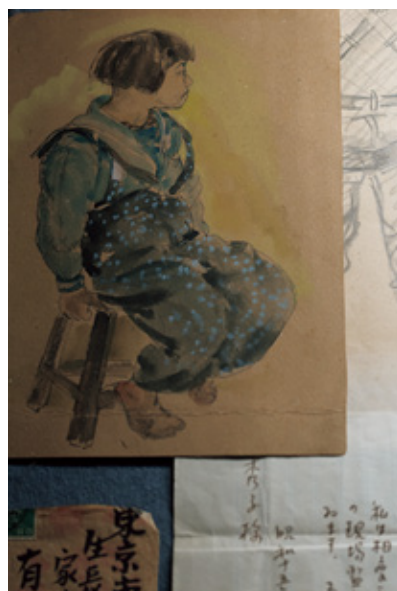
その旅から18年後、窪島氏との二人三脚の旅が始まる。NHKの番組時には、学徒兵に関する出征リストや戦没者名簿等の情報収集

が難しかったため、取材は東京美術学校出身の戦没画学生のみに限ったが、帝国美術学校 (現在の武蔵野美術大学と多摩美術大学) や京都市立絵画専門学校 (現在の京都市立芸術大学) など他の学校の学生や、独学で絵を学んでいた戦没者へと探索の幅を広げていった。

しかし、すでに戦後50年。「何せ風体の定かではない男2人で訪問するわけですからね、何か裏があるのではと疑われることもありました。野見山さんは東京藝大の先生を務めた方なのですが、どこの誰やらと不信に思われることも多くて。で、名刺を作ってくださいとお願いしたのですが、ただ、野見山暁治と名前があるだけの名刺でねえ(笑)」と窪島氏。野見山氏も「戦後しばらくの間、今のオレオレ詐欺ではないですが、戦没者の戦友を装って遺族を訪ねては金品をだまし取る詐欺が行っていた。だから、遺族からかなり警戒されましたよ」と語る。「でも、遺族にはなくて、亡くなった友人に会いにきたのだと訴えました。窪島君も3年間だけ作品を貸してくれと。その後は更新の手続きを取ります」と「当初は野見山さんもそれほど多くの作品は



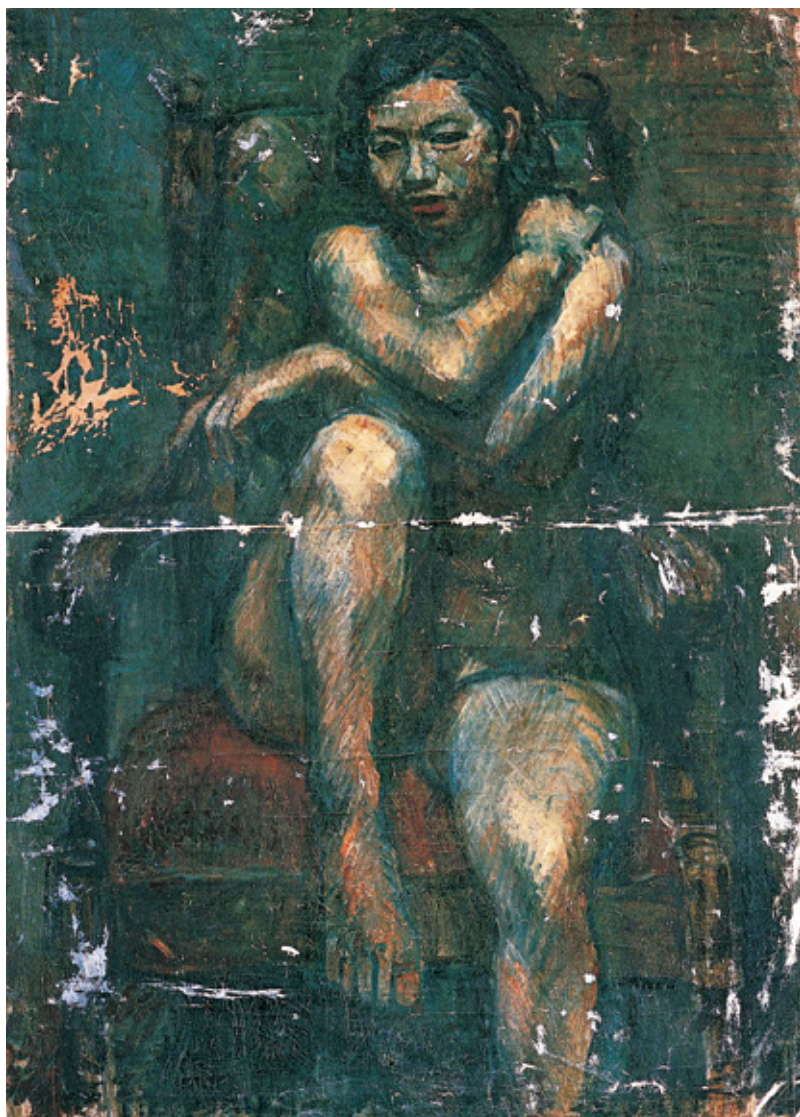
上／《月夜の田園》油彩。キャンバスボード 32×41cm 制作年不詳。右／戦地におけるデッサン。椎野修(1913～1945年)。1938(昭和13)年東京美術学校油画科卒業。39年応召、翌年除隊。44年再応召、45年ミャンマーで戦死。享年31歳。



集まらないだろうと思っていましたね。2、3年かけて38遺族にお目にかかり37名の80数点の作品を預かりました。信濃デッサン館の一隅に展示しようと漠然と考えていたのですが、未熟で完成度の低い学生作品であったとしても、『もっと描きたかった!』という声が聞こえてくるようになったんですよ」という窪島氏。そして野見山氏も「はるばる訪ね

て出会う作品の完成度が低かったり酷い保存状態だったりすると、がっかりしましたね。でも遺作収集の20年の間に、次第に彼らの絵が違って見えるようになったんです。たとえば「良い絵」でなくとも未熟でも、絵を描きたい、

描き続けていたいという気持ちがダイレクトに伝わってくる。学生ならではの純朴さというのか、邪念がない。美術館といえば名画名作を見せる場所ですが、こういう作品を展示する美術館があっても良いのではないか、と



思うようになりました」と言う。

そして、96(平成8)年には、北海道から種子島までの行脚の結果、57遺族から遺作と遺品約300点が集まった。翌年、信濃デッサン館の近くに無言館が開館する。現在では130名の作品約700点が収蔵されているが、修復が必要な作品もあり、常時展示できるのは170点ほどだ。2008(平成20)年には、戦没画学生の描いた石膏デッサンなどが貼られたドームをもつ第二展示館「傷ついた画布のドーム」も開館した。

長い年月をかけて収集し、寄付金を募ってまでして、学生作品のための美術館を設立した2人。彼らの背中を押してきたのは何だったのだろう。窪島氏はこう語る。「僕は高度経済成長期の波に乗って生きてきた。美術品



上／《霜子》油彩。キャンパス 89.3×64cm 制作年不詳。中村萬平(1916～1943年)。1936(昭和11)年、東京美術学校油画科に入学。41年の卒業とともに結婚。42年入営、華北へ出征。長男の誕生を知りながら、43年、蒙古連合自治政府(現在の内モンゴル自治区を中心とする地域)の第26師団野戦病院にて戦病死。享年26歳。

を扱う仕事もしてきましたが、戦争については何も考えていなかった。だから、彼らの作品がこのまま知られずに消えてしまうと思うと、自分にとって都合の悪いものをひそかに処分するような、後ろめたい気持ちになりました」。そして野見山氏は、NHKの番組での遺族訪問の体験を通して、「私は逃げることでできない、彼らの貴重な証言者だと、そのときになって思い知らされた」と、『遺された画集』（平凡社ライブラリー、2004年）の「あとがき」に書いている。

例えば、野見山氏より2つ年上の日高安典氏。大原美術館以外では西洋の油彩画の実物になかなか触れることのできない時代に、「油絵は絵の具の質感が大事なんだよ」と、19世紀フランスの画家ドーミエの代表作のひとつ《洗濯女》（現在オルセー美術館に収蔵されている作品か？）を教えてくれた。褐色系の色面による構成と、光と影の揺れるような効果、ねっとりした絵の具の質感など、野見山氏は今でもその色刷りを覚えているという。出征後に日高氏が制作した《ホロンバイルの夕暮》の大地の表現に、野見山氏はドーミエ



野見山暁治（のみやま・ぎょうじ）

1920（大正9）年、福岡県生まれ。1938（昭和13）年、東京美術学校油画科予科に入学。翌年本科に進む。在学中の42年に第20回春陽会に初入選。43年、美校を繰り上げ卒業し満州に出征。肋膜炎に水がたまる病気のため現地の陸軍病院に入院。経過不良により帰国。再入院中に終戦を迎える。52年～64年に渡仏。72年～81年東京藝術大学の教授を務める。NHKのTV番組『日曜美術館 折りの画集』への出演をきっかけに無言館設立に関わる。2014年文化勲章受賞。本学名誉教授。

に似た絵の具の扱いを認めている。そしてこう書き記す。「どんなにか日高さんは生きていたいと願っただろう」（前掲書）。

あるいは、4つ年上だった中村萬平氏。気っ風が良く女性にもモテた中村氏の後について、飲みに行ったり吉原に行ったり。その中村氏と卒業制作の絵のモデルだった女性との結婚を聞いて驚いている。中村氏の実家は浜松で有名な菓子屋だったため、モデルという職業の妻は歓迎されなかったようだ。だが、すでに妊娠していた妻を家族に預けて、中村氏は出征。長男の誕生後、産後の肥立ちの悪かった妻は亡くなり、彼もまた還らぬ人となった。両親の顔も知らないまま祖父母に育てられた長男は、家にあつた裸婦の絵《霜子》が母を描いたものであることすら教えられずには育ったという。

もちろん、無言館に展示されている作品は裸婦ばかりではない。日本画、彫刻作品もあれば、主題も人物、家族や風景、静物、植物など多岐にわたる。ここでは、椎野修の風景画を紹介しておこう。小品ながら穏やかな青と緑で描かれた田園風景は、心を静めてくれる

ような静謐な空気をたたえている。彼は「空も海もこんなに美しい。それなのに人間はどうして戦争なんかするんだろう」と出征前につぶやいていたという（『無言館 遺された絵画展』図録、2005年）。

また、日記には「若し再び生きて帰ることがあつたら、あらん限りの愛を以って此の自然の美を極めたい」ともある（前掲書）。

遺族の記憶を記録にとどめておくこともまた、学生たちが生きたことの証となる。野見山氏と窪島氏の活動は、物としての遺品や遺作収集だけでなく、失われゆく時代の記憶を掘り起こし、次世代に伝える営みでもある。

だが、2人は無言館での展示について気がかりな点もあると言う。絵や彫刻、スケッチや家族に送った絵手紙などが、このような形で公開されると彼らは想定していただろう

か。あるいは、望んでいただろうか——。これは、音校生の遺した譜面を完成作品と見なすか否かという問題と共通する難問だ。

本人たちがどこまで完成作と認識していた



のかは、今や誰にもわからない。それでも、と野見山氏は語る。「この世からさよならするんだと思ったとき、人はどのように世界を見るのだろうか。NHKから『祈りの画集』が出

たとき、『戦時中なのに親兄弟や恋人や風景を描いた呑気な絵ばかり』と不評でした。でもね、再び会えないかもしれない身近な人々や日常の一瞬、今見つめていたいものを描き続けた彼らの眼差しに僕は一縷の光を感じるんです。椎野修氏の兄もこう証言している。「弟はいつも、ふつうの人間の姿を描くのが好きでした。戦争だからといって、特別に暗い絵を描くことを嫌ったんです」（窪島誠一郎『無言館 戦没画学生「祈りの絵」』講談社、1997年）。

無言館の作品群は戦争と結びつけざるを得ないものだが、窪島氏も野見山氏も「右翼からは戦争讃歌、左翼からは戦争反対と解釈されたりする。でもそうではなくて、限られた時間を精一杯生きた彼らの青春を見てほしい」と言う。そして大石教授と同じ危惧を、野見山氏もまた抱いている。「戦争なんて今の学生たちが生まれる前の物語かもしれない。しかし、自分と同じように志をもつて学んできた仲間の大勢が殺されることになったら、彼らは私と同じような旅を生涯、胸の中で繰り返すことでしょう」

藝大130周年。

特集③

「GEIDAI 130 ARTS」 プロジェクトとは 何だったのか？

ほかにも、藝大でしか、
130周年記念事業でしかあり得ない
特別なイベントが目白押しでした。

スペシャルプログラム

130周年に限定して特別に企画した展覧会や演奏会など



澤学長の指揮の下、130周年アンバサダー諏訪内晶子
や演奏藝術センター客員教授の MALTA が演奏出演。

音楽×文学×演劇×天文=?
豪華客員教授陣が
総力を挙げて制作

シアター・シンポジウム
～光のパイプオルガンを～ 新しい時代への提言

2017年6月10日
@奏楽堂

層的に織りなすイベントを開催しました。夢枕獏（作家）、諏訪内晶子（ヴァイオリニスト）、林英哲（和太鼓）、MALTA（サクソ奏者）、安田茂美（アートプロデューサー）、西川信廣（演出家）、北條哲男（音楽プロデューサー）、吉井譲（天文学者）といったトップランナーたちによる発信はダイナミックで深遠。さながら芸術という宇宙を旅しているかのような世界が繰り広げられました。

「新しい時代に向けて、芸術がいかにあるべきか、私たちに問いかけ、また私たちから世界に問いかける機会になれど」という壮大なテーマの下、さまざまな分野で活躍する演奏藝術センターの客員教授が集結し、シンポジウム、朗読劇、コンサートが重

満員& スタンディングオベーション! 日本とチリの音の架け橋

藝大フィルハーモニア管弦楽団

日本チリ修好120周年記念演奏会

2017年6月20日～30日

@モネダ文化センター、サンチアゴ市立劇場、チリ大学ホール



2017年4月に日本オーケストラ連盟に準会員として加盟した藝大フィルハーモニア管弦楽団が、南米チリで演奏会を行ってきました。15年開催の藝大『障がいとアート』コンサートで生まれた、本学演奏藝術センター客員教授で天文学者の吉井譲氏が代表を務める東京大学アカマ天文台（TAAO）プロジェクト提供の映像と藝

大フィルの演奏とのコラボレーションを、プロジェクトの本拠地であるチリで披露しました。

3会場での演奏会はいずれも満員の観客からスタンディングオベーション。藝大の歴史と実績に裏付けられたオーケストラの演奏水準の高さによって、日本とチリの国際親善や文化交流に大いに貢献することができました。

パンドラの箱に眠る 作品の価値は? 卒業生の自画像にも注目集まる

東京藝術大学創立130周年記念特別展

藝「大」コレクション パンドラの箱が開いた!

第1期：2017年7月11日～8月6日

第2期：2017年8月11日～9月10日

@大学美術館

大学美術館では、2万点にも及ぶコレクションを見直し、新たな光を与える拡大版のコレクション展を開催しました。収蔵庫をパンドラの箱に見立てたのは、そこに眠っている作品や資料の価値が未知数であり、未来に拓かれていることを暗示するためでした。指定文化財など、すでに国から価値付けされたものもありますが、それ



はほんの一握りに過ぎません。今回は、いくつかのテーマを設定することで、日頃展示する機会の少ない作品をご覧いただくことができました。また、藝大を卒業して美術界で活躍するアーティストたちの自画像や卒業制作などにもスポットを当てることで、常に新しい作品を収蔵してきた美術館の姿を改めて見直すことができました。



藝大の造形技術と 最先端の科学技術で シルクロード美術の道が 新たに脈動

シルクロード特別企画展
素心伝心 クローン文化財 失われた刻の再生
2017年9月23日～10月26日
@大学美術館

卓越した造
形技術と最先
端の科学技術
を組み合わせ
た特許技術に
よる文化財複
製・復元の研
究開発を行っ
てきた東京藝術大学COI拠点・
文化共有研究グループが、シルク
ロードの文化遺産をテーマとした
特別企画展を開催しました。惜し
くも失われてしまった、あるいは
劣化が進み実物を鑑賞することが
難しくなってしまう文化遺産を
忠実に再現。古代シルクロードの
各地で花開いた文化を代表する遺
産がクローン文化財として甦り、
写真や映像、臨場感のある音など
と併せて展示され、五感でシルク
ロードの世界を体感できる空間と
なりました。この新たな試みに、
100社を超えるメディアが取材
に訪れ、期間中は多くの来場者
でにぎわいました。



photo : KIOKU Keizo

各界から多くの来賓を迎えた式
典は、邦楽科による「編曲松竹梅」
(三ツ橋勾当作曲、宮城道雄編曲)
の演奏が鳴り響く厳かな雰囲気
なか開幕。学長式辞、文部科学大
臣祝辞に続き、「東京藝術大学
NEXT 10 Vision」とし
て、「革新的であること」「多様性
があること」「国際的であること」
といった今後10年の歩むべき方向
性を発表しました。130周年
記念事業のアンバサダーを務める
松井冬子氏、葉加瀬太郎氏からの

前学長・ 宮田亮平文化庁長官の書、 どういう意味？ 今後10年の 藝大のビジョンも発表

創立130周年記念式典・祝賀会
2017年10月10日
@奏楽堂ほか

挨拶も会場を沸かせ
特別演奏会では、学生
と教員による特別編成
のオーケストラにより
「J・ブラームス 交
響曲第2番ニ長調作品
73より第4楽章」「J・
ブラームス 《大学祝
典序曲》作品80」の演
奏が披露され、大盛況
のうちに幕を閉じました。

前学長・宮田亮平文化庁長官から“大切な物を想像し、願いを必ず達成し、歴史を創る”という意味の金文『倒』を表現した直筆の書が贈られました。「日本を、世界をリードする藝術の拠点になっていただきたい」と宮田長官。



美校5代校長 正木直彦がディレクション 100年前に日本最高峰とされた 皇室献上作品

東京藝術大学創立130周年記念特別展
皇室の彩 百年前の文化プロジェクト
2017年10月28日～11月26日
@大学美術館

大正から昭和最初期、皇室では天皇の御大札（即位）などご慶事が続きました。関東大震災から復興期とも重なりながら、当代選りすぐりの美術工芸家が皇室のご慶事のために献上品を制作する国家規模の文化プロジェクトが進められました。それを指揮したのは東京美術学校5代校長・正木直彦。一般の目に触れることが少なかった作品と、美術界における正木直彦の多大な功績に光を当てた本展では、大正13年に皇太子御成婚を祝して東京美術学校が制作した《御飾棚》や《二曲御屏風》（昭和3年完成）など、皇居外初公開作品を中心に、美術学校にゆかりのある作家による優品が一堂に会し、予想を超える来場者数を記録しました。

藝大ゆかりの芸術家110名が 若手芸術家支援のために出品

東京藝術大学若手芸術家支援基金
チャリティー・オークション展
2017年11月10日～13日
@東京美術倶楽部 東美ミュージアム

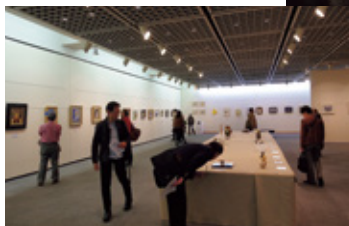
若手芸術家の支援を目的に、現任教員や卒業生など藝大ゆかりの芸術家から寄贈された作品をオークション形式で展示販売する藝大初の試みが行われました。出品されたのは、

澄川喜一、田淵俊夫、
絹谷幸二、野見山暁
治、千住博、O JUN、
奥谷博、宮田亮平、
日比野克彦ら110

人の作品。会期中には、本基金準備委員会委員長で大学美術館館長でもある秋元雄史と出品作家によるギャラリートークも開催されました。会場には4日間で810人の来場者があり、出展された110点は全て落札され、総額3707万円の売り上げに。売り上げは基金の原資となり、今後若手芸術家の支援に活用されていきます。



O JUN のギャラリートークの様子





藝大と三越の関係とは？ 藝大生気分を味わえる 公開授業も開催

東京藝術大学130周年×三越美術110周年記念
美術学部教員による作品展

2017年12月27日～2018年1月9日

@日本橋三越本店

2017年は、藝大にとって
は130周年、三越にとつては
日本ではじめて百貨店として美術
を取り扱う美術部の創設110周
年という節目の年。三越で開催さ
れた当初の展覧会資料には、菱田
春草、横山大観、黒田清輝、和田
英作など初期の東京美術学校の卒
業生、教員の名前がずらりと並ん
でいます。両者は長きにわたり協
力し合い、日本の美術を支えてき
たと言えるでしょう。

本展は、日本画、油画、彫刻、
工芸、デザイン、先端芸術、さら
に写真、学術的な書
籍まで、藝大の美術
学部・美術研究科で
学べる専門分野を幅
広く展観できる貴重
な機会となりました。
また、藝大茶会のため
に教員が特別に調
製した茶道具も展示。
教員によるイベント
も好評を博しました。



邦楽、ブラス、 鍵盤楽器、オーケストラ それぞれのテーマで 未来を奏でる

藝大130周年記念音楽祭

2018年1月6日～8日

@奏楽堂

130周年記念
事業の掉尾^{ちようび}を飾る
べく、また音楽学
部の歴史を俯瞰し
て未来への展望に
思いを馳せるべ
く、ジャンルごと
にテーマを設けて
4つの音楽会を開
催しました。邦楽

「百花繚乱」では2名の人間国宝
の出演、さらに能では観世流と宝
生流各宗家による奇跡の「石橋」
の共演が実現。ブラス「一期一会」
とオーケストラ「温故創新」では
齢80歳のトランペット奏者と現役
学生の共演でステージが盛り上が
りました。鍵盤楽器「未来永劫」
では古楽系の楽器演奏&レク
チャーに始まり、20世紀に一世風
靡したオンド・マルトノやムーグ・
シンセサイザーが登場し、「過去・
現在・未来」という全体テーマの
下、エンターテインメント性と学
びにあふれる会となりました。

邦楽「百花繚乱」より



21世紀の芸術大学は どこへ向かうのか？ 大陸をまたいで ビジョンを共有

五大陸アーツサミット2018

2018年1月8日・9日

◎東京藝術大学音楽学部

130周年記念事業の集大成として、またスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、南カリフォルニア大学、コロンビア大学、チリ大学、ベルリン芸術大学、モスクワ大学、メルボルン大学、ヘルワン大学（エジプト）の学長・学部長を招いてサミットを開催しました。

歴史も文化も異なるさまざまな



◎進藤綾音

地域の芸術大学の現状を知り、未来の芸術教育について議論し、21世紀の芸術のビジョンを共有する貴重な機会となりました。高校生、大学生、教職員、自治体や企業の方々など総勢400人を超える一般参加者との活発な質疑応答があり、結びには澤学長から次年度以降の開催を呼びかけ、盛会のうちに終了となりました。

注目のアニメーション プロジェクトを デパートのウィンドウで公開

ヴィヴァルディ「四季」
アニメーションプロジェクト×高島屋

2018年1月8日～31日

@高島屋日本橋店

大学院映像研究科アニメーション専攻山村浩二教授の監修の下、アンナ・ブダノヴァ、プリート・パルン&オルガ・パルン、和田淳、テオドル・ウシェフといった現代の第一線で活躍するアニメーション作家たちが、それぞれの解釈でヴィヴァルディ「四季」を映像化クラウドファンディングで資金を集めて制作、北九州市立響ホール、東京藝術大学奏楽堂で上映したも

のをさらに多くの方にご覧いただけるようにと、歴史的建造物である日本橋高島屋正面のショーウィンドウの6面全てを使い、90インチモニターで四季それぞれのアニメーションとコンサートの様子を紹介。ウィンドウを彩るビジュアルデザインは、デザイン科卒業生が担当しました。



こんなにたくさん!

公式プログラム

各学部・研究科が企画した展覧会や演奏会など

【美術学部】○ひろがる布 つながる糸 6月8日～18日 大学美術館 陳列館○うるしのかたち展 2017 8月17日～26日 大学美術館 陳列館○綾・染織 開設50周年記念展 11月3日～12日 大学美術館 陳列館○全国美術・教育リサーチプロジェクト・文化芸術基盤の拡大を目指して・「子供は誰でも芸術家だ。問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうかだ。パブロ・ピカソ」11月17日～12月3日 大学美術館 本館 ○GEIDAI meets SEIBU/SHIBUYA Arts Affair of GEIDAI 展 1月16日～29日 西武渋谷店

【音楽学部】○東京藝術大学音楽学部 同声会新人演奏会 4月15日 奏楽堂 ○藝大フィルハーモニア管弦楽団定期 新卒業生紹介演奏会(藝大定期第380回) 4月21日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート1 4月27日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート2 5月11日 奏楽堂 ○管打楽器シリーズ2017 吹奏楽の響き～フランスの輝き～ 5月11日 奏楽堂 ○藝大プロジェクト2017 ビバ! エスパーニャ～ヘグラナドスのスペイン! 5月13日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート3 5月18日 奏楽堂 ○弦楽シリーズ2017 ショスタコヴィチの肖像 5月21日 奏楽堂 ○ウィーン音楽演劇大学 創立200周年記念演奏会 5月24日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート4 5月25日 奏楽堂 ○東京藝大チェンバーオーケストラ 第29回定期演奏会 5月28日 奏楽堂 ○藝大21 創造の社 2017 藝大現代音楽の夕べ 6月2日 奏楽堂 ○藝大第九～チャリティコンサート第1回 6月4日 奏楽堂 ○藝大フィルハーモニア管弦楽団定期(藝大定期第381回) 6月9日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート5 6月15日 奏楽堂 ○藝大プロジェクト2017 ビバ! エスパーニャ～ヘグラナドスのスペインII 6月24日 奏楽堂 ○東京藝大シンフォニーオーケストラ 定期第56回(藝大定期第382回) 6月29日 奏楽堂 ○藝大21 藝大とあそぼう 古楽の考古学 7月1日 奏楽堂 ○東京藝大ウィンドオーケストラ 定期吹奏楽第83回 7月5日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート6 7月6日 奏楽堂 ○ヴェンツェル・フックスを迎えて 7月9日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート7 7月13日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート8 7月20日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート9 7月27日 奏楽堂 ○藝大21時の響き ジャズ

in 藝大～Challenging JAZZ 7月29日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート10 9月7日 奏楽堂 ○藝大21 和楽の美 源平の盛衰～有為転変讀 9月14日 奏楽堂 ○藝大オペラ 定期第63回 10月7日～8日 奏楽堂 ○藝大フィルハーモニア管弦楽団定期(藝大定期第383回) 10月14日 奏楽堂 ○藝大プロジェクト2017 ビバ! エスパーニャ～ヘグラナドスのスペインIII 10月22日 奏楽堂 ○管打楽器シリーズ2017 オーボエで魅せる至福の時間 10月29日 奏楽堂 ○上野の森オルガンシリーズ2017 フレスコバルディへのオマージュ 11月3日 奏楽堂 ○ピアノシリーズ2017 音楽の至宝 Vol.5 ピアノデュオの楽しみ 11月5日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート11 11月9日 奏楽堂 ○邦楽定期演奏会 第84回 11月10日 奏楽堂 ○うたシリーズ2017 ドイツ歌曲と宗教曲への誘い 11月11日 奏楽堂 ○藝大フィルハーモニア管弦楽団合唱定期(藝大定期第384回) 11月18日 奏楽堂 ○東京藝大シンフォニーオーケストラ 定期第57回(藝大定期第385回) 11月19日 奏楽堂 ○舞・飛天遊 11月22日 奏楽堂 ○東京藝大ウィンドオーケストラ 定期吹奏楽第84回 11月23日 奏楽堂 ○藝大プロジェクト2017 ビバ! エスパーニャ～ヘグラナドスのスペインIV 11月25日 奏楽堂 ○藝大21 藝大アーツ・スペシャル2017 障がいとアーツ 12月2日～3日 奏楽堂 ○藝大定期室内楽第44回 2月3日～4日 奏楽堂 ○東京藝大チェンバーオーケストラ 第30回定期演奏会 2月12日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート12 2月15日 奏楽堂 ○ルドガー・ローマン オルガンリサイタル 2月17日 奏楽堂 ○モーニング・コンサート13 2月22日 奏楽堂 ○藝大21 第12回奏楽堂企画 学内公募演奏会 3月30日 奏楽堂

【大学院映像研究科】○公開講座「コンテンツリアーアニメーション入門」第25回 5月21日 馬車道校舎 ○メディア映像専攻「OPEN STUDIO 2017」7月15日～17日 BankART Studio NYK ○「馬車道コンサート」第1回 9月6日 馬車道校舎 ○映画専攻「OPEN THEATER 2017」第1回 9月9日～10日 馬車道校舎 ○映画専攻「OPEN THEATER 2017」第2回 10月14日～15日 馬車道校舎 ○「馬車道コンサート」第2回 10月17日 馬車道校舎 ○公開講座「コンテンツリアーアニメーション入門」第26回 10月22日 馬車道校舎 ○「馬車道プロジェクト」2017 10月31日～11月3日 神奈川県立歴史博物館 ○馬車道まつり トワイライトコンサート「東京藝大ウィンドオーケストラ」11月1日 関内ホール ○公開講座「コンテンツリアーアニメーション入

門」第27回 11月12日 馬車道校舎 ○「馬車道コンサート」第3回 11月22日 馬車道校舎 ○映画専攻「OPEN THEATER 2017」第3回 11月28日 馬車道校舎 ○クリスマス・アニメーション・ワークショップ 12月2日～3日 たまプラーザテラス ○映画専攻「OPEN THEATER 2017」第4回 12月3日 馬車道校舎 ○「馬車道コンサート」第4回 12月20日 馬車道校舎 ○メディア映像専攻年次成果発表会「Media Practice17-18」1月12日～14日 BankART Studio NYK ○映画専攻第12期生修了制作展 1月27日～28日 馬車道校舎 ○「スクール・シアター」高校生対象 メディア映像専攻 2月4日 馬車道校舎 ○「スクール・シアター」中学生対象 映画専攻 2月24日 馬車道校舎 ○「スクール・シアター」小学生対象 アニメーション専攻 2月26日 馬車道校舎 ○アニメーション専攻修了制作展「GEIDAI ANIMATION 09 oh!」3月21日～4日 横浜美術館 レクチャーホール ○映画専攻第12期生修了制作展 3月3日～9日 ユーロスペース ○アニメーション専攻 公開講座「OPEN INNOVATION」3月10日 馬車道校舎 ○アニメーション専攻修了制作展「GEIDAI ANIMATION 09 oh!」3月21日～25日 美術学部中央棟第一講義室 ○映画専攻「OPEN THEATER 2017」第5回 3月24日 馬車道校舎

【大学院国際芸術創造研究科】○イミグレーション・ミュージアム・東京 フィリピンからの、ひとりひとり マキララ 一知り、会い、踊るー 7月29日 千住キャンパス第7ホール ○野村誠 千住だじゃれ音楽祭 第2回 だじゃれ音楽研究大会 8月26日 千住キャンパス ○国際シンポジウム 音楽から世界を見てみたら 10月10日 千住キャンパス第7ホール ○イミグレーションミュージアム 日豪の対話 10月15日 音楽学部5-109教室 ○フー・ファン 特別講義 意図なき空間にむけて:今日のアートのための空間における可能性 11月11日 音楽学部5-109教室 ○大巻伸嗣 Memorial Rebirth 千住 2017 関屋 11月26日 関屋公園 ○国際シンポジウム 社会関与の芸術 12月9日 音楽学部5-109教室 ○アサダフタ「千住タウンレール」聴きめぐりクルー! 1月21日 千住地域各所 ○「千住で聴く世界の音楽」第10回 小泉文夫と民族音楽の世界 1月13日 千住キャンパススタジオA ○千住・緑レジデンス 表現(Hyogen) 茶 MUSICA 1月28日、2月10日、11日、17日 仲町の家 ○野村誠 千住だじゃれ音楽祭 第2回 定期演奏会「かげきさ影絵オペラ」2月4日 千住キャンパス第7ホール ○アダチ・藝大・JAZZ 2月24日 竹の塚地域学習センター

ヴァイオリン片手に奔走しながら考えた これからの藝大

澤和樹(学長)

私も南米チリ(藝大フィルハーモニアのチリ公演)から大石膏室の片隅(藝大茶会の藝大席←お客様から見えない)までいろいろなところで演奏してきましたが、昨年6月から今年1月まで藝大の歴史を振り返る展覧会・演奏会や将来に向けたさまざまな記念事業が行われました。「世界展開」のきっかけとなった「五大陸アーツサミット」、「他分野との融合」の好例となった「素心伝心 クローン文化財 失われた刻の再生」展なども、藝大の発展に寄与する特筆すべきイベントだったと思います。

そして、それらとも関係してきますが、今後を考える上で、「法人化」は藝大のポテンシャルを拡大する大きなチャンスだと捉えています。2004年に国立大

学法人となって10数年、大学としてやるべきことが明確になってきたところで、130周年記念事業を行うにあたっては保護者、卒業生、元教職員をはじめ、藝大を愛する皆様方からご寄付を賜り、またオフィシャルパートナーとしてたくさんの企業の皆様方にご協力をいただきました。欧米と比較して、日本ではまだ寄付文化が根付いていないため、今後も教育や芸術に対して気持ちよく寄付していただける文化を醸成していくなくてはならないと考えています。そのためには、法人化のメリットを活かして社会や産業とのつながりを生み出し、芸術の価値をより多くの方に見える形で知ってもらう必要があります。それは結果的に、芸術家の活躍の場を広げ、学生や卒業生のキャリア支援にもつながるはずです。



1 時間目

「なぜか……熱海」
大学院映像研究科・映画専攻

まさか、二度目があるとは。

『藝える』が、ではなく、このページが、である。創刊号の前号で、日本の芸術教育の殿堂・東京藝術大学の美術学部、音楽学部などそれぞれの看板授業を恐れ多くも受講させていただいたのだが、「素人引ッ込め」の火の手がいつ迫るかと、実は布団をかぶって怯えていた（イメージ）。

ところが、編集者から届いたのは「で、次なんですけど」というメール。嬉しいじゃありませんか。また上野に行けるんだ！ と拳を握り締めたら、「いえ、横浜です」と、な？ 今回お邪魔するのは、大学院映像研究科。〈映像に関する創造の現場という観点から新しいテーマに取り組み、国際的に活躍することのできる専門家を養成すること〉を目的に、2005年に開設された科の授業は、港ヨコハマの地で行われているという。で、いざ横浜。のはずが、何でか今、熱海の波止場にいる。首都圏の奥座敷、日本のニースと称される温泉保養地。そこからフェ

リーで30分の場所にある離島・初島で、映画専攻2年生の修了制



授業 SANKAN

ハマの
映像研究科編

燃えているのは、上野の森だけじゃない！ 芸術オンチが
藝大に挑む不遜ルポ、第2回は、横浜校地に潜入です。

挿絵＝小柳景義 文＝大谷道子



作、つまり映画制作が行われているらしい。

「熱海って、一瞬『あ、モナコみたい』って思うんだけど、見るとちっちゃいんだよな。ハハハ」

フェリーに同乗するのは、同専攻の教授のおひとりである柳島ジミーク己先生。北野武監督作『ソナチネ』『アウトレイジ』ほか、手がけた傑作は数知れず、の日本屈指の撮影監督。近年は海外でのプロダクションにも参加する凄腕だ。ほかに、監督領域では黒沢清氏、諏訪敦彦氏、脚本領域では坂元裕二氏など、やはり第一線で活躍する教授方がズラリ。さすが藝大、である。

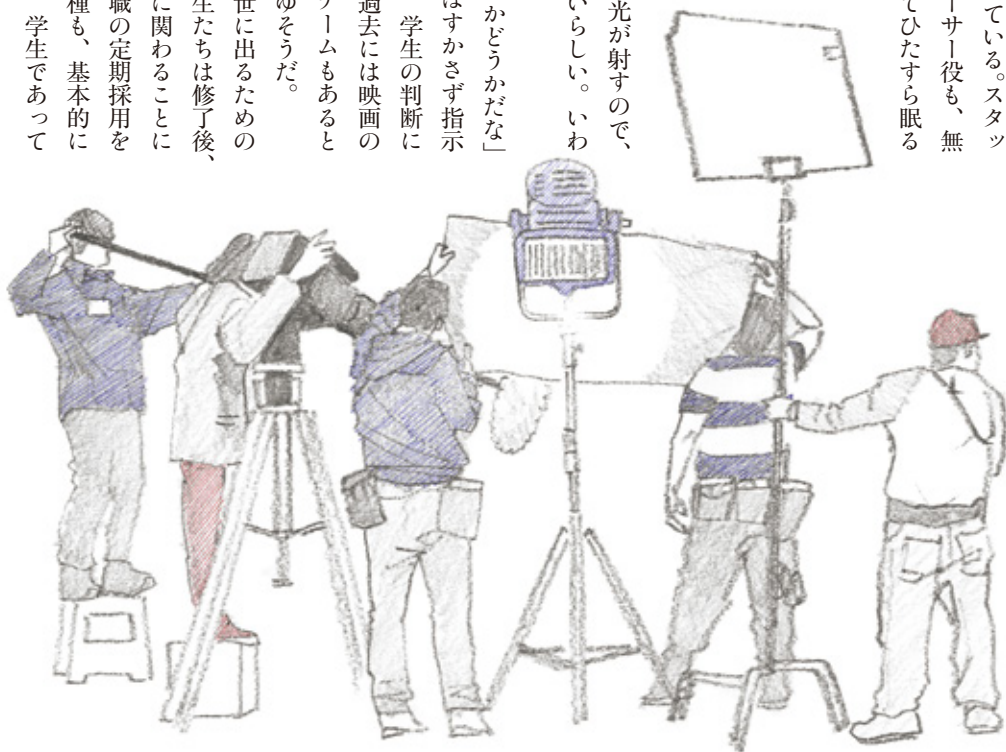
本日立ち会うのは、修士2年の山本英監督組の撮影で、作品のタイトルは「小さな声で囁いて」。あるカップルの旅を追いながら、「休日とは何か？」を問いかける作品だという。昼過ぎに到着した丘の上で、撮影はまさに進行中だった。外部から招聘した主演のふたりを除き、スタッフはざっと12〜13人。撮影部隊はカメラやレフ板を掲

げ、音声はマイクを高く掲げ、監督はモニターを覗き込み、助監督はカチンコを構えている。スタッフの間をぐるぐると巡るプロデューサー役も、無理がたたったのか、地面に転がってひたすら眠るスタッフも、もちろん学生。実に現場らしい現場だ。

が、カチンコが鳴らない。見ればスタッフ一同、しきりと空に目をやっている。そうか、光か。薄くまだらな雲が太陽の周囲を覆っており、そこから気まぐれに光が射すので、どうやらライティングが定まらないらしい。いわゆる「光待ち」の状態だ。

「撮れてもーカット（シーン）、持つかどうかだな」とジミー先生。実習（授業）ならばささず指示を出す場面だが、今回は修了制作。学生の判断に任せるのが教える側の務め。が、過去には映画の完成を待たずして崩壊した（！）チームもあるというから、先生、どことなく歯がゆそうだ。

しかもこの作品、彼らが実質、世に出るための足がかりでもある。映画専攻の学生たちは修了後、多くは何らかのかたちで映像制作に関わることになるのだが、大手映画会社が技術職の定期採用を行っている現在、現場はどの職種も、基本的にフリーランスの集合体。となると、学生であって



も、作品をコンペなどに応募して実力を世に問い、実績を積んでいかななくてはならない。勝負場所はいきなり世の中、という厳しい時代なのだ。

「撮監（撮影監督）、そろそろ判断して！」。ついに先生から声が飛び、スタッフが協議。急遽ライティングを組んで、撮影が再開された。撮影監督を務めるのは、中国の武漢出身の李子瑤さん。キャメラ隊の紅一点で「周りを巻き込むのが上手」とジミー先生も太鼓判を押す腕の持ち主である。

「アメリカの大学で学んでから、日本に来ました。中国の人、同期にも多い。まあ、中国人、もともと数が多いですから（笑）。日本の映画では、イマムラ（今村昌平）とか、洪くでエクスペリメント（実験的）な作品が好き。映画を撮るのは面白いです。監督と話して、脚本の中の感情の流れで撮り方を決めていきますが、映像の中でどのくらい表現できるか？とか、考えるのが楽しくて」

卒業後は「ビザが厳しいので」中国に戻るかもしれないという彼女。「ジミーさんとも仕事したいです」と微笑む。全体的には、職業人を目指すというより、自らの好きな世界観に基づく作品づくりを追求したい若者たちが多いようだ。

「そのスタンスには、正直ちょっと、思うところがありますね。ものづくりは、継続してはじめて職業になる。どんな職業でも、一発屋じゃ意味が

熱海初島



時間目 「考える回路」 大学院映像研究科・ メディア映像専攻



続いては、元町中華街校舎で行われているメディア映像専攻の授業へ。1学年16名という少数精鋭が学ぶこの専攻、メディアデザイン領域で教鞭をとるのは、TVC Mや教育番組、TVゲームなど幅広いジャンルで創作活動を行っている佐藤雅彦教授。今も脳裏に鮮やかな湖池屋のCMの数々に、大ヒットした『だんご3兄弟』。日々の生活の始まりと終わりがNHKのEテレで放送中の『0655』『2355』だという人も、きっと

ないでしょう？ 職業監督、職業技術者としてやっていく人が、もっと増えてもいいと思う」とジミー先生。叩き上げらしい、経験と実績に裏打ちされた言葉は、彼らにどう響いているだろうか。ゆるゆると日が傾き、この日のラストカットは、初島を出るフェリーを見送る夜の景。船上から見ると、岸壁の学生たちがみるみる小さくなっていく。頑張れ、頑張れよ、と（映らないように）心で手を振るジミー先生と我ら取材隊。今、彼らのカメラに映るのは東洋のニース。でも、その夢がいつか、本物のニースやカンヌでも花開くように。

多いことだろう。授業シラバスには（これまででない教育上の手法を研究・開発）とある。まさに教授が手がけた『ピタゴラスイッチ』で育った世代の院生を相手に、はてさて、いかなるユニークな授業が……と、来る道みち、想像を巡らせたが、そのどれともかけ離れた、まさに斜め上をいく光景が目の前にあった。豆電球。乾電池。スイッチやIC（集積回路）と、もじやもじやのケーブル。これらアイテムを手に、学生たちがあってもない、こうでもないと格闘している。これって工学部の授業？ いや、どちらかといえば中学校の理科の時間？ これはれっきとした、「論理と回路」と題する実践型カリキュラム。教授曰く、「論理」という概念的なものを回路という具体的なもので表すことをやりたいたいと思います」として、今、「多数決回路」なるものを具現化せよとの課題が出されているのだ。「3人のうち2人がスイッチを入れたら電球が点く回路を作ってください」

えーと、AさんとBさんとCさんがいて、AとB、BとC、あるいはCとAが賛成すればいいわけだから……古の記憶を総動員して、直列つな



ぎ、並列つなぎの図を描こうと試みる。が、あっちがこうなってる、あれ？ そうなるとどうなるの？ 学生たちも話し合いで筋道を立てようとする組、いきなり実践する組、それぞれに格闘している。

あつという間に10分経過。「第1のヒントは、回路図をノートに描いてみる。それを愚直に



表現することです」と佐藤教授。しかし言うは易し、表すは難し。時間が経つと、前向きなグループと、白目で呆然とするグループとの差が如実になってきた。前者はやがて正解を見つけて快哉を叫び、次なる課題に取り組む。後者は沈黙し、半ば冷戦状態だ。が、ここで教授の言った「愚直に表現する」ことの意味が見えてくる。とにかく、頭を整理すること。そして、手を動かすこと。できるまで。

「できましたか？ 今、皆さんは回路図に沿っていちばんきれいな回路を組んだわけですが、現実はそのすごく複雑。もつといろんなコードが絡まって配線されている状態です。でも、概念の中でそれを整理し、変形させていくと、現実もそれに沿ってうまくいくようになる。そのことを、ぜひ覚えてほしいんです」

この紙幅でうまく伝えられるかわからないが、立ち会ったひとりとしては、その教授のひと言でスコン、と天井が抜けた感じがした。考える回路は、いつだってシンプルでいいのだ。きつと。

Logic
circuit.
論理と回路

思っ、こういうことをやっている。新しいものを創り出すとき、どうやって自分の力でそこに行き着くか、そのための方法を教えたい、というか」壁にぶつかったときは、論理に頼ったり言葉に頼ったり、ありとあらゆる方法でクリアする。アートを、デザインを志す者の日々は、その連続だ。知恵を絞り、手を動かす者だけが、次のステップに跳べるのだから。熱海の離島を歩いたこと、中華街で電気回路を組み立てたことを、5年後、10年後、20年後の彼らが脳裏にとどめていてくれませうに——という願いを込めて、映像研究科の授業ルポ、駆け足ながら、これにて御免。上野だけでなく横浜にも、いい風、吹いてました。



藝える人

村澤丈児

大学院音楽研究科
博士後期課程2年

むらさわ・じょうじ / 1991年生まれ。福島県郡山市出身、在住。通学は上野まで新幹線で。
最優秀学生に贈られるアカンサス音楽賞を学部卒業時と大学院修士課程修了時に受賞。



皇居での御前演奏からTVアニメのBGMまでこなし、専攻の箏だけでなく三味線や尺八も演奏。「何でも屋なんですよ」と言っている彼は、こう見えてまだ26歳の学生だ。

めざめ..物心つく前から

全員が謡曲を嗜む家に生まれ、母は藝大の邦楽科(箏曲生田流)卒。「座れるようになった2〜3歳の頃には箏を弾いてましたね。5歳くらいから謡曲を始めて、尺八やピアノもやっていました」。自然と音楽そのものを好きになった少年は、小学生高学年のときに東京藝術大学音楽学部附属高校で音楽を学ぶこ



箏曲生田流では箏のほか、三味線、歌も学ぶ。パチは一本の象牙からとる必要があり、三味線本体と同じくらいのお値段。

とに憧れ、中学で専攻を箏に決め、進学した。「藝高は1学年に1クラスで40人くらいしかないのです、邦楽以外にもいろんなジャンルの人と交流できて面白かったです」

まよい..自分にしかできないこと

あまり迷ったり悩んだりするタイプではないが、この時代に古典をやる難しさはある。現在取り組んでいる研究課題は、幼いころから親しんできた謡曲と、京阪地方で江戸時代に興った三味線歌曲・地歌との関係。「あまり文献が残っていないので、過去に行われた研究や言い伝えのほかは、残っている曲を史料にするしかない。でも弾いてみると『あれに似てる』とわかったりして、演奏家にしか

できない研究があるんですよ。あとは、能楽や歌舞伎、国文学など多岐にわたる疑問が出てきたときに、藝大にいますぐ聞きたい人はいたり、外部の協力も得やすかったりするのがあります」

ゆめ..伝統音楽を世界へ、未来へ

お箏が人気の習い事で愛好家が多かった時代と違い、今は演奏会の内容や演出も幅を広げていく必要がある。「僕のやっているジャンルは古いものを大事にする風潮が強く、学ぶのに時間がかかりますが、結局は聴く人あつてのもの。聴く人の感覚や社会が加速度的に変化しているなかで、そこどう関わっていくか。芸術ってそこから離れたら終わってしまうので。今はネットで手軽に発信できますし、対象を広げていくことは大きな課題です」

地元福島の復興のための活動としては、平成29年度「文化芸術アソシエイツ人材育成プログラム」に研修生として参加。「福島県で音楽プロジェクトを行いました。今後も一つのテーマとして続けていきたいですね」

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

今後の催し

◎大学美術館の展覧会

＊「Powers of PLAY」展

3月21日～4月8日

@大学美術館陳列館

＊東西美人画の名作《序の舞》への系譜

3月31日～5月6日

@大学美術館本館

＊NHK大河ドラマ

特別展「西郷どん」

5月26日～7月16日

@大学美術館本館

＊日本画第二研究室 素描展

6月23日～7月5日

@大学美術館陳列館

＊戦前・戦中・戦後の美術教育(仮称)

7月下旬開催予定

@大学美術館陳列館

＊イチケン展2018

8月下旬開催予定

@大学美術館陳列館

＊台湾文化光点計画

台湾の現代写真(仮称)

9月中旬開催予定

@大学美術館陳列館

◎奏楽堂の演奏会

＊同声会新人演奏会

4月14日 1部13時 2部18時

2000円

＊藝大フィル定期第386回

新卒業生紹介演奏会

4月20日18時30分 1500円

＊ティッターリントン

オルガン・リサイタル

4月22日15時 2000円

＊モーニング・コンサート第1回

4月26日11時 1000円

＊モーニング・コンサート第2回

5月10日11時 1000円

＊モーニング・コンサート第3回

5月17日11時 1000円

＊藝大プロジェクト2018 1

5月20日14時 2000円

＊モーニング・コンサート第4回

5月24日11時 1000円

＊管打楽器シリーズ1

5月25日19時 2000円

＊藝大第九

5月27日15時

全席指定 S席5000円

＊創造の杜「現代作曲家シリーズ」

6月1日19時 3000円

＊藝大フィル定期第387回

6月8日19時 3000円

＊モーニング・コンサート第5回

6月14日11時 1000円

＊藝大チェンバーオケ定期第31回

6月16日15時 1500円

＊シンフォニーオケ

プロムナードコンサート

6月19日11時 入場無料

＊モーニング・コンサート第6回

6月21日11時 1000円

＊藝大プロジェクト2018 2

6月23日14時 2000円

＊管打楽器シリーズ2

6月30日15時 2000円

＊ウィンドオケ定期第85回

7月4日19時

一般1500円

高校生以下500円

＊モーニング・コンサート第7回

7月5日11時 1000円

＊藝大とあそぼう

7月7日14時

高校生以上1000円

小中学生500円

未就学児無料

3歳未満入場不可

＊モーニング・コンサート第8回

7月12日11時 1000円

＊モーニング・コンサート第9回

7月19日11時 1000円

★モーニング・コンサート第10回

7月26日11時 10000円

★戦没学生のメッセージ②

7月29日14時 20000円

★サマーアーツジャパン

8月5日

時間・入場料未定

★モーニング・コンサート第11回

9月6日11時 10000円

★和楽の美「信長・秀吉英雄譚」

9月13日18時30分

全席指定

S席50000円

A席40000円

＊展覧会・演奏会の名称、会期などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学美術館

☎03-5777-8600 (N

TTハローダイヤル)

＊演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学演奏芸術センター

☎050-5525-2300

＊演奏会チケットの取り扱い

東京芸術大学生活協同組合(店頭販売のみ)

☎03-3828-5669

ヴォートル・チケットセンター

☎03-5355-1280

東京文化会館チケットサービス

☎03-5685-0650

チケットぴあ

☎0570-02-9999

イープラス

<http://eplus.jp>

さまざまな取り組み

☎取手校地の「藝大食堂」

2017年7月、取手校地の生協食堂が12年の歴史を閉じ、新たに10月から「藝大食堂」がオープンしました。地元の食材を活かした手作り定食や焼きたてパン、自家焙煎コーヒーなどが好評です。運営はNPO法人取手アートプロジェクト



『取手アートパス 2017』では「風景と食設計室 ホー」と食堂スタッフによる「世界とわたしの手のひら食堂」の特別プレートを提供

トオフィスに委託。アーティストの活動支援などに長く取り組んできた団体とタッグを組み、食の提供をはじめとする福利厚生の実践に加え、取手校地の多彩な活動を学内外にアピールする情報発信力の強化にも努めていきます。

☎パリ国立高等美術学校とのグローバルアートプロジェクト

2016年に発足した大学院美術研究科グローバルアートブラクティス(GAP)専攻では基幹授業として、海外の芸術大学と共同授業

を行っています。パリ国立高等美術学校とのプロジェクトでは、教員と学生が日仏を行き来しながら授業を行い、上野谷中地域で古民家を舞台に成果発表展覧会を開催、多く方にご来場いただきました。今後も共同授業を充実させ、アートの社会実践と国際的に活動するアーティストの育成を目指します。



成果発表展覧会での個別講評の様子

☎SGH

藝高の英国演奏研修旅行

音楽学部附属高校は、平成28年に文部科学省「スーパーグローバルハ



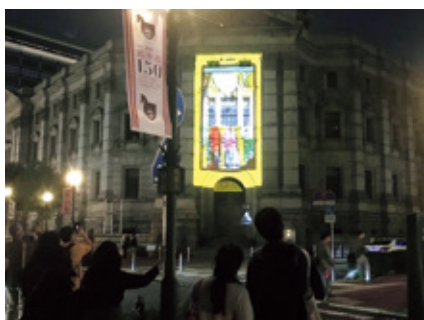
イスクール（SGH）の指定を受け、大学の協力を得ながら、「音楽の力で世界を魅了する先導的グローバルアーティスト育成」を目指して活動が続けています。昨年9月末には、澤学長同行の下、2年生が英国王立音楽院での演奏会、パーセル・スクールとの合同演奏・交流会を実施し、大きな成果を上げることができました。平成30年度も英国演奏研修旅行を含め、積極的な活動を計画しています。

藝大レーベル



藝大レーベルのウェブサイト

ネットの普及によって世界中に音楽を届けることが可能になりましたが、個人の配信を世界に広げていくのはそう簡単ではありません。そこで、そのような世界を目指す学生のキャリア支援システムとして、ワーナーミュージック・ジャパンとの連携で「藝大レーベル」を立ち上げました。2017年6月にリリースされた第一弾では、クラシックから邦楽まで、音楽学部で演奏専攻の学科から選出された精鋭9組による全20曲の演奏を千住キャンパスのスタ



**馬車道プロジェクト
2017**
2017年10月31日～11月3日、横浜市文化観光局と本学との地域貢献事業の一つとして、学生・修了生の映像作品による『馬車道プロジェクト2017』を実施。歴史的建造物である映像研究科馬車道校舎（旧富士銀行横浜支店）から対角線

ジオで収録しました。現在、第2弾の制作の準備が始まり、演奏者の選考や演奏曲の検討が行われており、近日中にリリースされる予定です。

2016年4月に新設された大学院国際芸術創造研究科では、地域コミュニティとともに「国際的な視座を持つこと」、「理論と実践の両面



実践編：取手コースでのミーティングの様子

**グローバル時代の
アートプロジェクトを担う
マネジメント人材育成事業**

上にある神奈川県立歴史博物館（旧横浜正金銀行本店）に向けて映像作品を投影し、スマートフォンミネーション横浜や、馬車道まつりのにぎわい演出にも貢献しました。

から事業の企画・運営ができること」という2点を重視しながら、アートプロジェクトを企画・運営する若手アートマネージャーの育成を目標に、2016年5月から人材育成事業に取り組んでいます。今後も国際シンポジウム、海外からゲストを招いてのセミナー、ワークショップなどを千住、上野・谷中、取手の地域アートプロジェクトの実行団体と共同で開催する予定です。

ユラシア文化 交流プロジェクト

2001年に爆破されたアフガニスタン・バミヤン大仏の再建の是非を問う国際会議を2017年9月27日～10月2日にかけて開催しました（アフガニスタン政府およびユネスコとの共催）。会議には19カ国から80名を超える文化遺産専門家が参加し、今後、大仏再建に向けて協議を続けることで合意しました。会議ではイタリア、ドイツなど各国の研究者グループによる具体的な大仏再建案も提示され、本学も武庫川



バミヤン大仏がかつて存在していた大窟は負の遺産としてそのまま保存し、対岸の崖にモニュメントを再建する日本案（武庫川女子大の岡崎基幸教授提供）

女子大と共同で日本案を提示しました。ユラシア文化交流プロジェクトでは、開発のため消滅の危機に瀕するアフガニスタン、メス・アイナク遺跡出土品の保存修復なども進めています。

藝大アーツイン丸の内

三菱地所と東京藝術大学がコラボレーションして次代を担う新鋭アーティストを支援するとともに、丸の内を訪れた方々に気軽に芸術を楽しんでいただく秋の恒例イベント『藝大アーツイン丸の内2017』を

2017年10月16日～29日に開催しました。卒業・修了作品展に出品された中で特に優秀な作品として三菱地所賞美術部門を受賞した作品の展示や、音楽学部卒業・修了の際、特に優れた演奏者として選ばれた三菱地所賞音楽部門受賞者による演奏会、ライブペインティングや藝大生の作品のオークションなどの革新的な取り組みを実施。今後もさまざまな文化芸術のイベント・情報発信を展開し、さらなる文化発信を進めてまいります。



全国芸術系大学コンソーシアム

我が国の芸術文化の振興・持続的な発展や、国際展開などを推進するため、大学の枠を超えた連携・協力により芸術実践活動や人材育成共同プログラムなどをダイナミックに展開することを目的として2016年に設立した「全国芸術系大学コンソーシアム」には、現在56の芸術系大学が加盟しています。これまで、文化庁の支援の下、実践型の若手アートマネジメント「文化芸術アソシエイツ」の人材育成を中心に展開し、17年度は、宮城県気仙沼市および熊本市における復興支援プロジェクトや、文化庁のオープンスペースなどを展示空間として使用した『Arts in Bunkacho トキメキが、爆発だ』を開催。さらに、人材育成プログラムを強化したほか、加盟大学による全国展開を目的に、福島県、長野県、静岡県、愛媛県、九州地区で地域資源を活用した文化プロジェクトを展開。2020年に向けた文化プログラムも試行的に実施しました。

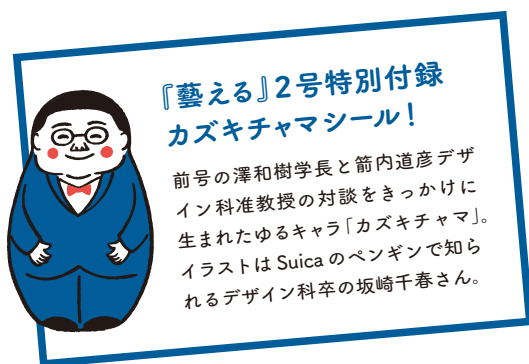
内田正巳様	小原光一様	不破悦子様
梅崎壽様	坂口悛治朗様	堀川将史様
梅林太郎様	佐野美登里様	本多佐保美様
遠藤雅夫様	柴田健様	増子佳世様
大塚浩史様	清水晴雄様	松島宏充様
大森啓之様	鈴木康彦様	松平朗様
岡田範仁様	世川勇様	水原光代様
岡部裕子様	高木正勝様	宮城薫様
岡本靖正様	田中千義様	宮沢敏子様
柿沼誠様	谷村秀様	武藤智恵子様
柏木由紀様	田野辺美江様	村上徳子様
加藤義之様	千葉一彦様	村上眞理子様
金井満様	椿和実様	村山勝美様
川口美佳様	新島治男様	森智子様
木内寿美子様	西川圭子様	門田泰子様
菊田靖様	端地則仁様	安田孝一様
國方聖司様	日比谷友妃子様	山岡耕作様
栗田有子様	平山聡子様	鐘水裕二様
栗林理人様	福岡直太郎様	横山邑二様
小池健様	福田紀子様	吉岡千賀子様
小島綱夫様	船山一史様	

[法人の皆様]

株式会社おさむ様 1000万円
 株式会社平成建設様 300万円
 藝大48実行委員会(昭和48年度音楽学部入学有志) 100万円
 アブロス株式会社様 30万円
 医療法人橋本病院様 30万円
 株式会社聖ルカレジデンス様 20万円
 株式会社日本ヴァイオリン様 20万円
 特定非営利活動法人上野芸友倶楽部様 10万円
 株式会社ドルチェ楽器様 10万円
 エスワンファイブ株式会社様 5万円
 スタインウェイ・ジャパン株式会社様 5万円
 株式会社大成工業様 5万円
 株式会社ヤマハミュージックジャパン様／
 株式会社ヤマハミュージッククリティリング様 5万円
 株式会社 GTM 総研様 3万円
 株式会社ダク様 3万円
 株式会社タケダバスーン様 3万円
 日本ダブルリード株式会社様 3万円
 ライブスペース Qui 様 3万円
 伊達モリアル様 1万円
 女子東音会様 5000円
 同声会京都支部様
 株式会社電子署名認証様
 株式会社松尾楽器商會様
 一般財団法人若林暢音楽財団様

[130周年オフィシャルパートナー]

野村ホールディングス株式会社様
 株式会社 SMBC 信託銀行様
 株式会社西武プロパティーズ様
 東京トヨペット株式会社様
 富士通株式会社様
 株式会社伊豆栄様
 株式会社エヌケービー様
 株式会社 NKB Y's 様
 株式会社ぐるなび様
 株式会社シグマコミュニケーションズ様
 損害保険ジャパン日本興亜株式会社様
 中川特殊鋼株式会社様
 公益財団法人日本交通文化協会様
 公益財団法人日本美術院様
 パナソニック株式会社様
 三井不動産株式会社様



編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。



〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8
 東京藝術大学内 『藝える』編集部
 Fax : 03-5685-7760
 E-mail : toiwase@ml.geidai.ac.jp

お問い合わせ

渉外事業企画室 ☎ 050-5525-2400
 藝大基金ウェブサイト <http://fund.geidai.ac.jp/>

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜りました皆様に、深謝申し上げます。

本号では、2017年6月から2018年1月までに寄附の申し込みをされた皆様に

掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

[個人の皆様]

滝久雄様 200万円

田中秀幸様 130万円

阿部志保様 100万円

阿部辰子様 100万円

加藤隆様 100万円

川村香様 100万円

関根知孝様 100万円

西川里美様 100万円

西川伸一様 100万円

本木下道子様 100万円

和久洋三様 100万円

岩本よね子様 50万円

安藤正夫様 30万円

池田栄作様 30万円

大出ヒロ子様 30万円

柿坪英志郎様 30万円

清水久盛様 30万円

菅生晴美様 30万円

竹内清二様 30万円

布施武司様 30万円

益子義弘様 30万円

徐碩様 16万 9807円

秋吉昭子様 10万円

荒木成光様 10万円

岡高生様 10万円

栢木寛照様 10万円

川上耕治様 10万円

川元千明様 10万円

木村富貴子様 10万円

熊田充博様 10万円

縄田昌司様 10万円

丹羽勝彦様 10万円

廣田和美様 10万円

牧山康枝様 10万円

山下正明様 10万円

浅川豊夫様 5万円

阿部光浩様 5万円

大沼清人様 5万円

加部千恵子様 5万円

河本馨様 5万円

杉村佳代子様 5万円

高田明典様 5万円

田尻正廣様 5万円

田中寧様 5万円

柘植元一様 5万円

土屋敦雄様 5万円

藤原睦子様 5万円

宮坂宥明様 5万円

柳澤美枝子様 5万円

山崎政弥様 5万円

湯浅芳雄様 5万円

粧美智子様 5万円

小野洋子様 4万円

千葉真知子様 4万円

羽鳥健司様 3万 2千円

上野作次郎様 3万円

エルツ貴子様 3万円

笠井誠一様 3万円

菊川政弥様 3万円

木村鈴代様 3万円

熊谷玲子様 3万円

小島裕子様 3万円

小松幹太様 3万円

笹野浩樹様 3万円

下田京子様 3万円

玉置雄三様 3万円

中村篤様 3万円

樋口泰子様 3万円

湯山昭様 3万円

渡辺和子様 3万円

磯貝紀枝様 2万円

岩坂實様 2万円

小川準一様／

小川恵美子様 2万円

海鋒正毅様／

海鋒淳子様 2万円

加藤伴子様 2万円

上川智子様 2万円

古関齊様 2万円

小林伸一様 2万円

野口和義様 2万円

露澤美穂様 2万円

福田弘行様 2万円

藤山圭子様 2万円

山田安孝様 2万円

阿部博子様 1万円

阿部まさえ様 1万円

阿部雅人様 1万円

新井繁男様 1万円

荒井夏美様 1万円

蟻川隆正様 1万円

石黒秀子様 1万円

石原寿子様 1万円

祝井堅太郎様 1万円

上原昇様 1万円

内山友美様 1万円

移川澄也様 1万円

宇都宮淑子様 1万円

遠藤成夫様 1万円

大村徹様 1万円

岡本治之様 1万円

岡本洋子様 1万円

小田島雅子様 1万円

及部保雄様 1万円

風間健次郎様 1万円

方山栄哲様 1万円

金山裕美様 1万円

上敷領藍子様 1万円

川崎知様 1万円

川島和郎様 1万円

川島余里様 1万円

川瀬麻規子様 1万円

岸邊洋子様 1万円

木曾原邦之様 1万円

窪田雅章様 1万円

古閑久美子様 1万円

小櫻秀爾様 1万円

小島美子様 1万円

近藤弘様 1万円

齋藤榮子様 1万円

佐藤美代子様 1万円

佐藤れい子様 1万円

島田康弘様 1万円

白川千奈美様 1万円

新堂彰久様 1万円

杉野森創様 1万円

外山雄三様 1万円

高橋美佳様 1万円

武内園子様 1万円

田島亘様 1万円

田所厚一郎様 1万円

田中拓生様 1万円

常森寿子様 1万円

徳永博陸様 1万円

戸松令子様 1万円

中谷茂次様 1万円

中橋文夫様 1万円

新居浩様 1万円

長谷川克枝様 1万円

馬場夕美子様 1万円

檜山昌子様 1万円

平川修様 1万円

平塚久子様 1万円

藤岡亜美様 1万円

古川誠様 1万円

堀江振一郎様 1万円

前田周一様 1万円

町田眞澄様 1万円

松宮尚美様 1万円

丸山澄子様 1万円

峯佳代子様 1万円

村上晃夫様 1万円

村山則子様 1万円

八木健様 1万円

吉田尚正様 1万円

渡邊幸夫様 1万円

伊沼綾乃様 5000円

嬉野紀子様 5000円

大貫紀子様 5000円

三林輝男様 5000円

永坂友康様 5000円

服部恵美子様 5000円

藤中智光様 5000円

布施田千都様 5000円

古川佐季子様 5000円

鷲尾浩昭様 5000円

今成秀延様 3000円

亀谷由美子様 3000円

中林恭子様 3000円

牛田尚様 2000円

久保法之様 2000円

佐藤幸人様 2000円

青野多賀乃様

新居昌明様

石井新二様

石川博之様

一ノ瀬久子様

市村由布子様

伊東京子様

伊東毅様

伊藤清子様

伊藤由紀様

稲垣実様

井上あい子様

井上陽一郎様

猪腰桂子様

岩井清高様